麻生路郎主宰

川柳雜誌

十二月號

大正十三年三月三日第三種郵便物認可　昭和九年十二月一日發行　第十一卷第十二號（毎月一回發行）

どんなに忙しい人たちにも一冊

川柳雑誌！

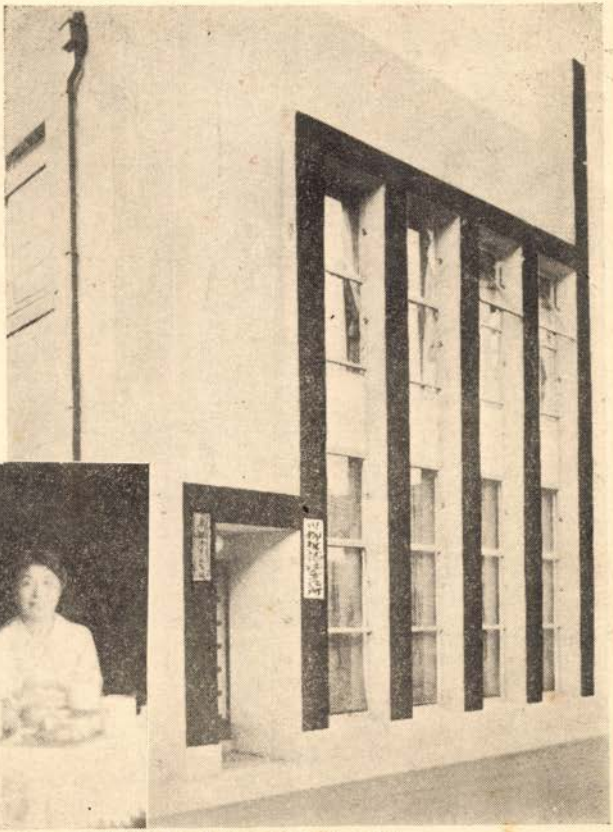
事務所移轉

今般左記へ移轉いたしました。郵便物、送金その他社務一切はすべて新事務所へ願ひます。

大阪市天王寺區上汐町一丁目五一
（但シ上本町四丁目バス停留所西ノ辻南）

川柳雑誌社

電話南(75)四六四四番
二六九番
振替大阪七五〇五〇番



本社の新事務所と最近の主幹廉生路郎氏夫妻

甲戌柳壇を送る

麻生路郎

一九三四年も、殘りすくなになつた。もういくらあがいても、どうすることも出來ない。

本誌としても、私としても、今年は相當に闘つたつもりだ。私は數回の放送と、鮮滿川柳行脚と、川柳のための東上と、四國支部聯合會への出席と、その他京阪神幾多の川柳會への出席と、いろ〳〵な方面への執筆と講演とで殆んど私の時間の總てを費つて來た。

×

九月中旬に井上劍花坊が鎌倉で急逝した。

×

十一月には本社の事務所が發展の希望を抱いて移轉した。

×

今はもう來るべき乙亥柳壇に對する劃策で一ぱいである。

川柳雜誌第十一卷第十二號目次

題字及扉重政
表紙繪故き
故き
ょし

文苑

甲戌柳壇を送る……麻生路郎…(一)

武玉川二篇研究(八)……梅本秋の魚屋 森東省二…(三四)

月評 金・銀・鐵……路郎、雨迷、汀柳、帥樂、山雨樓…(一九)

この頃の私……食滿南北…(三〇)

北澪莊から……山本雨迷…(三一)

武玉川二篇の句解に就いて……梅本塵山…(四〇)

男の親は女の爲にも親也……安川久流美…(四一)

是空庵を悼む……麻生路郎…(五八)

凡人の言葉……辻いの助…(四三)

兄弟を語る……(四六)

私の高弟? 生田翠夢　先生ちがひ　江戸みつる

急先鋒は弟　橋本迷兆　浪漫的であれ　橋本白史

向日葵のそれに似て　宮田甫三
消え失しまふ　清水白柳子

足袋のことから　宮田豐次
共同戰線を張る　清水友帆

川柳パイロット欄……福田山雨樓…(五二)
古理窟雜筆……梅木廣山…(五六)
川柳二十日會の記……不朽洞主人、蔑乃…(三九)

創作

近作柳……麻生路郎選…(四)
川柳塔……麻生路郎選…(三二)

粒々集

柳涛、秀久流美、明、蓉……(四三)

日本名所名物川柳（大阪の巻）

……麻生路郎選…(四四)

（一七）淀川安治川木津川（一八）宗右衛門町

一路集

馴染……西田艸樂選…(五四)
堤……吉田水車選…(五五)
本社十一月例會……汀柳記…(五一)
各地柳壇……路郎、艸樂整理…(五九)
上汐町から……汀柳…(四〇)　編輯の窓……山雨樓…(七一)

近作柳樽

路郎選

つまらない役目妾に泣かれてき　神戸　朝雨
龍宮の門くぐらせる水族館　同
猥談のはずんだとこへ女事務　同
消防車一丁先の人を分け　同
運のない自分と知つた流れ星　同
暴風雨警報解・除水すまし　大阪　阿伽陀
反目の村をまたいで虹が立ち　同
妾宅に隣れば秋を知る抜毛　同
家出して來て高壓線の多い町　同
肺病んで女の仕事させられる　同
手柄かや男は戀をもてあそび　今治　輝親

百燭の下銀簪がゆれてゐる　同

粧ほへど涙のあとは消えぬもの　同

膝枕すると千鳥が鳴いてゐる　同

風襲水禍

死體の傍に倒けた道標天を指し　大阪　大門

打揚げた汽船蜻蛉の中にゐる　同

水の引く柱に時計鳴つて居り　同

復興

水引いた地に新しい牛の糞　同

眞直ぐに歸れば葱の香の家庭　神戸　某人

秋だ！祭の猪口の手ざはり　同

三枚目假髪をとつて胃が悪い　同

大阪大風水害を悼む

月へ物干して災後の難波潟　同

農村の疲れ祭りも雨となり　長野　柳兒

秋晴れの退屈洗濯褒めて居る　同

宿直の無聊電話の戀があり　同

金といふかなしいくすりのんでゐる　髮ケ池　靜太

つめたい手でせうと女言ふなり　同

秋の風光る粉ぐすりのんでゐる　同

子を抱いてやる先生のかへり道　兵庫　觀月

子が一人二人物質的になり　同

愛の力一家溺死となりにける　同

滿洲へ飛ぶ氣も有つた戀ざんげ　同

忘れるにや戀のやけどの大き過ぎ　大阪　あや美

眞劍な戀を遊戯にされて居る　同

あてもなく出て秋風になぶられる　同

愛妻にして缺點はたんとあり　高知　珍景

添乳する煙管生活線のもの　同

鶴嘴が線路と雲の峯を打つ　同

大根の穴あり蛙眞ツさかさま　松山　耕一路

南瓜の花よ――そこは肥溜　同

教養をむしろ女は淋しがり　高知　梨生

俯伏して寢る娘に多い好き嫌ひ　同

團體で有無を云はせぬ義捐金　同

沈默の二人へ小猫もつれて來　盛中　耕朗

繩【】暖簾足迄月がさして來た　同

蛸の足三合位呑めるなり　同

書の尺八も又あはれなる　嘉知　青雨

ちちははに頼られてゐる手だ足だ　同

甘言に乘る應接の歌時計　同

銀行員といふもの

金持へこびた心へ自己嫌惡　竹原　春帆

曉童君を訪ふ

勞働と詩と同居する君でした　同

あきらめに似たものがあり妓の微笑　同

世をゆづり錆た鐵瓶出すもよし　神戸　久米雄

倦怠期盛り場を行くまるい月　同

ルンペンが月に染つて中之島　同

べちやんこの鼻が株屋で儲けてゐ　今治　紫陽

まだ損のない算盤へよどむ指　同

ははが先づ養子話をほのめかし　同

諸法空、私は腹がへりました　螢々池　浮鬼

生きてゐて熱は三十八度臺　同

膳による蜂の自由を許したり　同
子澤山父は器用に孫を抱き　京都　白英
父さんが吹く口笛をうれしがり　同
縁談を斷はつてゐて戀もなし　同
さて產んで見ればかはいゝ子澤山　西條　孤鶴
手を洗ふ波とは知らず鯉が寄る　同

旱害また風水害

大自然怨みもならで眼をつむり　同
動物の食慾で麥飯を食ふ　竹原　呂烈
鐵鎚のかなしい音に生きてる身　同
マルクスの廣い額に僕の夢　同
錦繪の美人男の部屋にゐる　大阪　節子
戀もなく嫁ぐに父のはしやぎよう　同
犧牲とはかなしき夜の女なる　同
夏浦團のとぢ糸ゆるみ秋たける　蕨ケ池　子羊吹メ　志世子
黎明に何憂ひあるわがこころ　同
ことゝに自我通す人かなしかり　同
恩讎の心はしなく年の暮　千里山　沐天

許可不許可左右のポケツ捜つて見　大阪　同

生きて行く掛値の中で氣が弱し　新市街

おつき合ひもう笑へない握り飯　同

貧しさをかくしきれない膝頭　神戸　九葉

山脈はひとすじ秋の大神戸　同

つり錢の乘替場所であはてたり　大阪　素月

颱風へ猫を殘して避難する　同

物思ひうつかりつけた赤インク　今治　心府

養婿の庭掃く姿さげしまれ　同

けだものの臭ひで街へ屯ろする　愛媛　宵明

銀扇の舞妓へ秋のしのびより　同

秋晴れの四天王寺に塔もなし　大阪　葉光

病人がうどんを奢る夜の長さ　同

秋風がむほんな事は止せといふ　大和　翠峯

爪切つて大望抱く身をかこち　同

お稽古へ使ひに來た妓も舞はされる　松江　雛千代

合拳の續いて口がつかれたり　同

雲脚の速さ案ずる間もあらず　好啓兒

春團治の落語おほかた二枚連れ　同

秋風に曝書の頁めくれたり　竹原　蛙庵

警邏表淋しくありて貸家札　同

思惑が外れて戻る月の道　名古屋　笑巴亭

今日からは假の親持つ高島田　同

西大阪風水害風景（二句）

とり圍む煙の邊り生き殘り　大阪　天國

毛布かぶつた眼に視察團靴光る　同

弱點を掴んで女ニヤリとし　神戸　港兒

落葉する秋の舗道で切れた緣　同

地下道の女きれいな音をたて　大阪　水客

訴訟沙汰ぼつ〳〵あつて世に復し　同

とんぼとんぼ佳境に入つた紙芝居　今治　伶人

下宿屋の窓女湯も見えるなり　同

ドン底に居てたゆまないいゝ女房　名古屋　嵜喜固蘊

捨てがたき詩情の中の山の小屋　同

思想には無關係なる苺の實　蒲松　柳夢

小娘の虫賣聲は虫のやう　同

あくびする美人の顔を見てしまひ　大阪　白葉

パンとチ、外交員の晝となる　同

生活はこんなものかと凍豆腐　金澤　綠水

あきらめた師走の窓に藥瓶　同

出張のカバンふくらまして歸り　神戸　明坊

痩せた夫肥つた妻の仲がよし　同

ハガキ一枚秋を深めて今朝居き　東京　薫舟

理髪屋の鏡を通るいゝ女　同

千日前ぬけてお金を借りに行き　大阪　末廣艸

風水害

默祈の濱邊に下駄が浮いてゐる　同

秋の雨金魚の夢も聞いてやり　今治　一風

戀捨てゝ男まさりと噂され　同

冷飯にもう馴れてゐる婿養子　大阪　菊路

借金で生きて居るとは子は知らず　同

うらがへる落葉は秋の道化者　桑ヶ池　縷紅

くたびれた砂はわたしの影となる　同

ビルの窓下界は軋る青と赤　奈良　葉魚

相槌を打つて抜目のない男　同

五重塔鳩も死體となつて出る　大阪　彩泡

美人かときけは共産黨さと答へ　同　同

菊の芽がのびた朝寢をしかられる　竹原　彌生

いみじくも俺の個性を靴が知り　同

默つては居れど課長と違ふ說　今治　史郎

繼ぎ繼ぎの靴下履いて信じられ　同

もう金魚沈んでばかり秋深み　島根　淞外人

十二月ポケツト寒し襟寒し　同

間借して用心棒と云ふ形　竹原　芳泉

事務机追はれる樣な背の丸味　同

棧橋の半分飛んだを笑はれず　大阪　未知路

戀愛は割切れぬまゝ秋の冷え　同

養蠶

桑を喰ふ音にうつろなわが心　松江　勁一郎

繭の値にあつさり心嗤はれた　同

出勤の道コスモスが咲き出した　京都　正祐

青春の頃と同んなじ萩の花　同

秋晴へぢつとしとれぬ生活にて　今治　比呂史

おちついた胸にしらがのちゝとはゝ　同　同

夜の長さ麻雀荘の赤い窓　東京　史葉

受附に冬の日がある村役場　同　同

和尚様ハムエグスを知つて居る　大阪　正夫

灰色の感情が有り堺筋　同　同

箱根行（二句）

汗ふいて大湧谷の湯氣を越え　同　馬首

ひぐらしが鳴いて熱海の湯のにほひ　同　同

頭ばつかり下げてはがゆいうちのひと　同　雅仙

懸値ある俺を颱風がひんむいた　同　同

詫言がいと滑かに言へてよし　金澤　きよし

オールドミス化粧と別の蟠り　同　同

まかれずとそで持つて行く戎橋　大阪　正明

ここだけは僕のはいれんネオンの灯　同　同

二重橋にて

月はまろくするどく光る劍を立つ　東京　比呂詩

富士瀧ヶ原廠舎にて

おさなごころが裾野の雨にぬれてゐた　　小松　同

大勢で叱られてゐる面白さ　　しとし

夏山のこんな所に遭難碑　　同

藍の香のゆらめく夜具に久し振り　　高知　藝花國

滯る家賃も知らず・糸瓜のび　　同

母の後姿に強く生きてゐる　　京　素描

金なんか笑つて見たき夜もありて　　同

眉細き女は逃げて來ると云ふ　　大阪　洋三

ぎら〳〵と金齒の世辭が寒いなり　　同

一點のすきなく街へ秋が來る　　神戸　勝太郎

せなの子を花火へむけるともう暗だ　　同

食ふて行く事につかれた宵の星　　今治　十靜

不作でもやはりすゞめが來て居ます　　同

吠えられた露路へも流すシュウマイ屋　　神戸　吉左右

茶碗酒ふつと毛脛を淋しがり　　同

幸福を胸一つばいに帶をしめ　　兵庫　木圭

返す日の金庫の音をいらだゝす　　同

しばられてゐる生活の段梯子　　今治　小樓

みなし子の僕　　同

兄弟のある人の顔みてゐたり　　名古屋　令風

溜息の捨て場に氣付くこぼれ萩　　同

口惜しさもやつぱり娘鏡へ來　　大阪　利生

大阪の役人大阪辯で云ひ　　同

人様の物を預る腰の鍵　　今治　蛇之助

表面は笑らつてすます男にて　　同

虫の聲山の乙女はよく太り　　奈良　双亭

篝火へ手をぬくめてる秋祭り　　同

兵營の隅に野菊のこぼれてる　　稲實

打水の跳足へ風呂が沸きました　　同

長男の死へ先妻が泣きに來る　　桂江　洋二

更けた夜女給に逢えばおそろしく　　同

情熱の吐息猫まで飛び上り　　廣島　均

トンネルを幾つもぬけて谷清し　　同

町の灯はいゝが體が弱いなり　　大阪　世間音

このたびは命捨ふて酒を飲み　　同

儲けても居ます男になりました

今日の水のありがたさにゐる私　今治　五所

ひがむ心へほろ馬車がゆく　同　花鳥

苦勞症白毛一本拔いて呉れ　大阪　同

ゴーストップ見向きもせずにおばあさん　東京　一葉

面會所せめてこゝだけ國訛り　同

ふみにじる草の青さにたぢろぎぬ　泉州　華坊

槇の葉のこんな所に吹込まれ　同

災害後いもを煮る夜は笑ひ聲　大阪　佐津美

サービスはコーヒが只飲めるだけ　同

樂屋から星が見えます村芝居　島根　春朗

晩酌を禁めれば魚の骨が立ち　同

煙突に今の自嘲を挫がれる　神戸　木履

子が癒へて疊の上へ蟻の來る　名古屋　上上

アパートが好きな女で不運なり　松江　祥月

風邪が食堂を通過する　大阪　寒草

ねころんでボンヤリしてどうする氣

黴熱つゞく

あじけなき檢溫秋の日は暮れんとす　鶯ケ池　巷巴

あんのじやう大審院でくつがへり　大阪　千秋

トランプに肩を凝らして今日も暮れ　靈ヶ池　蔦女

人間でもしなかつたらと思ふ日よ　松山　靈子

母と居て不平云ふのを美やまれ　松江　柳人

牛肉を買ひましよ今日は勘定日　大阪　不路子

天井へ瞳を投げて見たものゝ　今治　小松

罹災者へ焚出しの飯眞白し　兵庫　天秋

號外は浪華の人の死を知らせ　加賀　義風子

黑眼鏡まじめな人に見えぬなり　大阪　いの助

面白く讀めて氣になる父の咳　神戸　楚堂

トンボの夢へ夕陽たぢろぐ　今治　都留逸

ペン蛸のインクをとして我が體　名古屋　紘靖

前垂がたゞの身でない市場籠　大阪　笙人

足の裏しみ〴〵と見た病上り　奈良　青柿

酒の味知つてる猪口の輕いこと　朝石　秀太

夕暮れの寒さがうつる子の立居　靖玉　いね三

机から空見る顏の無表情　大阪　小三

こうまでも虐げ義母は煙草喫ふ　同　紅桃子

咳一つか二つ軍事講演會　廣島　ひさし

のろけ箱へ覺悟をきめたのろけやう　松江　逸行

動搖へ慣れきつてゐるバス分ール　大阪　雅星

かなしさは深かき蒲團の中にゐる　蛍ケ池　美智子

停電に明治を偲ぶランプ出て　大阪　琴泉

五分作と云ふ百姓の良く値切り　岐阜　武絲

夜遊びの歸りは月もないのなり　島根　大朗

法事とは名ばかり皆んな呑む氣で來　大阪　孝吉

轉宅へ母に內證で賣る道具　同　玉格子

光る靴妾の家も知つてゐる　兵庫　玻瑠

くつろいで先づ名物を口にする　神戸　天風

馴染の藝妓今日洋髪の眉を引き　東京　無鐵砲

風害の見舞で終る集金人　大阪　冬籠

ABC鷗が描く海が晴れ　松江　氷月

倖な茶漬がうまい日本人　大阪　狸妖

美人局女は煙草吹いてゐる　同　動

露の玉碎いて朝の馬草刈る　伯耆　一柳

月評

金・銀・鐵

路郎、　山雨樓、　艸樂
雨迷、　汀柳

路郎——今夜の月評は從來やつて來た樣に近作柳樽の中から、川柳塔の中からと云ふ樣な句の拔き方ではなく、最近吾々が最も大きな衝擊をうけた風水害の句を川柳家がどんなに感じたか、句としてはどう取扱つて來たかと云ふ事を檢討してみたいと思ふ。句の提出方法も從つて、一句出してそれに就いて詳細に句評を試みる場合もあるし、又、或る作家の句で風水害に關する句が多い場合には引つくるめて句評するのも面白からうと思ふ。それで先づ第一に大鶴喜由君の句から批評してみたい。

風水害に寄す

(一)いつてまゐります(ごめ)の吾子なりし
(二)引き出して泥を拭えば人の子だ
(三)妻は乳房われは臍まで水をうけ
(四)龍神のおやまの夢に迫る水
(五)拘引をされるあまたの紀の國屋
(六)浸水だ平家だ無產階級だ

喜由

路郎——これらの六句の中で私は(二)の句を最も痛烈な句として推奬したい、それから五の句、これは穿ちの句であるが作者が冷やかに世相をみてゐる點、又、こうした非常時に際して或る人達の心の動き方をはつきりみせてくれる點などから非常に面白い句だと思ふ。

雨迷——私もこの句が第一番に目についた自分の子供が風水害に遭ふて、そうした感じをまとめたとしたら、讀むに堪えぬものがこの句からせまるであらうと思ふ。これが客觀的に詠まれたものとして實感したものゝ感じも及ばぬ位、最も適當な表現が出來てゐるよい句だと思ふ。

山雨樓——(四)の句が面白いと思つた。面白いと云つてはあの大風禍に對して失禮な言葉かも知れぬが、句としてこう云ふ境地を客觀視した處に興味をもつものである事實に即した點からは遙かに放れた、想像を交ぜた句の樣であるが、堺が水禍の最も甚だしか

つた點からみて、直ちにこの句の味ひを浮べる事が出來た。

路郎――(四)の句は大體技巧の句で、どちらかと云へば、いや味に陷入る場合が多いのであるが、これ丈けに纒め上げた點は敬服に堪えない。只前に述べた句の如く直ちに實感に迫るものが少ないから、その點第二位に落してもよいと思ふ。

艸樂――今晩風水害の句に評を加へるとの事であるが、今月號の雜誌によつて痛切に感じたる事は、この災害に際して集つた句は非常に優れた句が多い、それに就いて人間美と云ふ事を考へた。平素路郎主幹の一面を暗さにあると評されてゐる。美は櫻の滿開の下でなくて、現代人の求むる藝術美は人間苦の泥濘の中から堀り出された寶石かなどの樣な、人生の體驗の底に見出されるものが、美として最も尊いのではなからうか、で今回の災害に際し川柳家がその體驗から詠んだ句の如何に深刻な藝術美を味ふ事よ、それで平素の路郎主幹の「暗さの美」が理解出來る樣である。喜由君の句の中で(二)の句などはその標本的の句の樣に思へる。

雨迷――六)の句の表現方法は變つた型で纒め得られてゐるけれども句の持つてゐる味は、この變つた型と云ふ事を超越して味ひを持つてゐる處に興味を持たせてくれた。作意に就いても川柳として面白味が充分に盛られてゐると云ふ事がその一つであり、階級意識と云ふ事と、今回の風水害に結びつけて巧に云ひ表はしてあると云ふ事が二であり、最後は作者がこうした問題を變へた表現方法で自由に取扱はれたと云ふことである。全體の呼吸が引締められて そうした氣持に批評を加へられない程度に出來てゐる處に興味を覺えさせられた。

路郎――この(六)の句の表現法、三段式ピリオットとでも名付けられる形式は特に新らしい表現法ではないが、この場合前述雨迷君の解かれた內容をぴつたりと盛り込んでる處が手柄である。

汀柳――六句共に粒が非常に揃てゐる樣に思ふ。路郎先生の云はれた樣に第二句に一番先きに引きつけられた、痛々しい災害の現狀を眼の當りに見せられた樣な感じがする。(三)の句の手法には風水害の中に輕さを持つて來て表はしてゐる、(六)の句も雨迷君が云ひ盡されたものであるが、一氣にこの句を讀めば只それ丈けのものゝ樣にも思へるが、二度讀み、三度讀み直して見るとこの句の力強さとそして世相を盛り込んだ點などが優れてゐることがわかる。

路郎――今、汀柳君が(三)の句の事を批評されたが、この句を讀み下すとまざ〳〵水害現場の光景を思ひ浮べる方に多少の滑稽味を思はせられ、そして乳房と臍で男と女を表はした點も面白いし、そした對照が滑稽味を思はせられるのではないかと思ふ。そして乳房と臍から實際を想像して見ると妻と夫との背の事が餘りに隔り過ぎてゐる樣に思はれるが、そう云ふ科學的な事をこの句から想像せしめずに、句の面白味を感じさせられるのも所謂絵空事なるものが海外に於て生きておるのと同樣に川柳に於いても必ずしも句は科學的から或る點脫出して其境地を出してゐるものだと云ふ事がわかるであろう

風水害(六句)

(一)大風を刑務所だけが知らなんだ
(二)大毎も止まり、豆腐屋も止まり
(三)遭難へ貯金の尻が五十錢
(四)お見舞に行けば屋根から聲がする
(五)ローソクで馬鹿なお客へ酌いでやり
(六)さるほどに高利貸からビラが來る

豆秋

路郎――次は須崎豆秋君の六句に就いて云へば、これ等の六句が六句共大變面白く詠出されてゐる、(二)の句は穿ちとして仲々鋭い處を把んでゐるが、風水害の時の實狀を知らない人がこの句を讀へだ時には、所謂難句に屬すべき句であらう。

艸樂――この六句は必ずしも實感句でなくても豆秋君になら詠める句だ由來豆秋君は非常にいゝ素質を持つた川柳家で、この六句

もそうだが他にも穿ちの句が多い樣に思ふ、で豆秋君のその素質なり作句精進が、近來非常になだらかな句を詠んでゐる、それ丈けに何にげなく讀んでゐると 讀者の方では輕く讀み過ごす事がある、然しそれは讀者が惡いのであつて、川柳家が豆秋君の如くありたい事が願ひである。(五)の句などは豆秋君らしい觀方で、然かも深いものがあると思ふ。

路郎 ——(五)の「ローソク」の句は所謂痛烈骨を刺す皮肉な句で、さうした情景を靜かに見てゐる作者の態度を心憎く思ふ 先程「大毎」の句に就いて風水害の時の情況を知らぬ人達には所謂難句になると云つたので、その間の事情を知らぬ人の爲めに 解說をして置き度いと思ふ。あの風水害が起つた其の大事件を直ちに報導しなければならぬ 立場にある新聞社が 電力が止まつた爲めに一枚の號外すら出し得ず 啞然たる事件に遭遇した一方、日常何の苦もなく吾人の食膳に提供せられてゐた豆腐が豆腐屋も又、停電の爲めにピタリと豆腐の供給が止まつて了つた。大資本と小資本の對立、當然出來るものと思つてゐるもの、當然出ると思つてゐるものがどちらもピタリと止まつて了つたので、そこにこの作者の冷徹な批評眼が飛んだのである。その裏には作者の社會觀、人生觀と云ふものが、ありありと讀める。

山雨樓 ——(一)の構想、(三)の悲慘・(四)の穿ち、(五)の皮肉、(六)の技巧、何れも達者なものであるが、やはり(二)の句が最も心を射た。先程路郎先生が述べられた樣にこの句を味つつてゐると、川柳の持つ深さが盡きないと共に 其處に川柳のよさが認められると思ふ。つまり云へば川柳でなくては詠えないこの十七文字を禮讚したい。

雨迷 ——僕は豆秋君の 川柳と云ふ事に就いて、其の人となりをよく知らない關係にあるのでこの人の句が斯うした 方面の行き方をみせてゐられると云ふ點も知る事が 出來たのであるが、今度の風水害の句に就いて發表された句から思つてみるのに、僕はその作句の角度が常に一つの基調を以て 進まれてゐると云ふ事が判つた 然し何れも自由自在に取扱はれてゐると云ふ反面に 味ひの足らなさを感じるものがある樣に思ふ。それはこの人の句の行き方が さうした信念の下にあるからで (二)の句など仲々面白いとも思ふし(五)の句なども面白いと思ふ。處でこの人の句作が主として 客觀的な角度に於てあるので主觀的なものが、そこに出るとすればこの作者はもつと面白い句を 吾々に提供されるに違ひないと思ふ。

山雨樓 ——僕も以前 そう云ふ事を感じたのであるが、豆秋君の佳句を矢繼早やにみせられて、最近ではあの行き方でいゝのだと云ふ風に思はれて來た。なまじつか涙もろい感傷などが飛び出すよりか、この行き方で益々進まれた方が 本當の豆秋君を出すのではないかと思はれる 句を讀んで直ぐ豆秋君が感ぜられる程期待したいものである。

艸樂 ——豆秋君の客觀的の句と云ふものは、例へば寫生句が寫生を 目的にした寫生句と自分の持つてゐる思想なり 情想を寫生的表現に依つて、つまりシンボリズム的の素材が寫生的の樣になる如く、一見客觀的であり乍ら其の裏に作家の持つてゐる詩想が ひそんでゐる事を見逃してはならない、そこに豆秋君の句は充分に見るべきものがあると思ふ。

汀柳 ——僕は (一)の句が非常に面白いと思つた。俗に云ふ婆婆が風禍に遭つて苦るしんでゐるのに、苦るしみにあるべき囚人達が刑務所の大きな城壁の中に在つて、何等の精神的なショックも受けずに、無事平穩な境地にあり、あの恐ろしい颱風を知らずにゐたといふ。川柳のもつ處の 一つの特徵である諷刺も思ひ切り表はして、尙構想にも優れてゐると思ふ。

路郎 ——それでは次へ移ります。喜由、豆秋兩君は罹災者でなかつたが、今度は罹災者の詠んだ風水害の句を檢討する事にしたい。

風　水　害

水は減るへる慾をとり戻し　夕　鐘

山雨樓 ——成る程實感の句だと肯かれた。古句に「泣く〳〵もよい方をとる形見分け」

と云ふのであが、同樣な手法であつて、然かもこの句が事實に即して居ると云ふ點で 古川柳のそれに劣らぬ 强味を持つてゐる樣に思ふ。又句の叙法も巧まないで然かもよく云ひ表はして居ると思ふ。

艸樂——夕鐘君は 浸水の最も激しいと云はれた市岡に居を有し、あの浸水が極めて瞬間的に壁の上何尺といふ凄ましさで、一家は取るものも取敢へず二階へ馳せ上つた、そして二階の窓から濁流が家財商品などを 渦を卷いて持ち去らうとしてゐる光景を見た、水から二階へ上つた時には、丁度綠雨氏の句「逃難民家財なんぞはいらぬ也」と云つたあわて方で逃げたのであらうが、水が追ひ〳〵に減つてゆく時には流石に吾れに還つて、浸水した家財、流れたる商品に慾をとり戻した態をこの句に依つて察しられる。

雨迷——この句は 五七五調式の句ではないけれども、この句はさうした場合の實想を極めて素直に云へてあると思ふ。その實感は人間と云ふ者を赤裸々に持つて來て 生かしてゐると云ふ點でよいと思ふ。

大颱風水害(九月廿一日)

濁流へろうそくの灯の片ちびり
浸水の庭に 鯰が 泳ぐなり　　鮎　美

山雨樓——濁流の句は 寫實味に優れてゐると云ふ外に、或る藝術美と云ふものを感じさせられた。この間芥川龍之介の「羅生門」を讀んで惡の美にうたれたのであるが、この句には悲壯美といつた樣な 光りに浸る事が出來る。「浸水」の句は或ひは事實ではないかも知れぬが、鮎美君が浸水の慘禍にあひ乍ら、こういふ句をものした處に 川柳の力を通じて心のゆとりを窺ふ事が出來る。

路郎——濁流の句は 直ぐ實況が恐ろしく陰慘に迫つてくる事を感ぜしめられる、この句で特に云ひたいのは下五の「片ちびり」と云ふ表現である、作者鮎美君の纖細な觀方がよく出てゐて、こ 「片ちびり」の表現がなかつたなら折角の「濁流」の句も强い陰慘味を加へなかつたであらうと思ふ。(二)の句は或は事實でないかも知れぬが と云ふ意見が出たが、寧ろ事實ではあらうが句を讀むと事實でない樣な氣がする表現になつてゐる。成程さうした境地にあつて 鯰が泳ぐのを句に纏めたと云ふ心をもつ鮎美君のゆとりのある 態度には敬服するが、句そのものには如何にもそらゞ〳〵しい樣な處があつて 充分に受入れかれる點がある。

山雨樓——僕は 事實ではないかも知れぬと懸念したのは 浸水の庭に海の魚が泳いでゐた事を鯰の句にした、と云ふ點にかゝつて居るので、先生がそらゞ〳〵しく思はれたのも或ひは其處にあるのではないかと思はれる。

路郎——鮎美君の罹災地は 大和田であるから鯰が引潮と共に逃げ遲れて 庭に泳いでゐたのは事實であらうと思はれるが、繪空事で繪が生きる場合と 丁度その正反對で事實であつても、それが嘘の樣にとれる事はまゝある。この場合がそれであらう。芝居でも腹へ刀を突き刺して 非常に長い物語りをするけれどもそれが不自然でなく受けとれるのと、前に述べた「乳房と臍」の句との距離は相當隔れてゐるのに さほどに目立たないのとある樣に 事實であつても句としては爲りに近く感ぜられて 興味をもつ事が出來ない場合がある、この句などはその一例であらう。

雨迷——(一)の句を味ふと云ふ事は、味つてゐると心がほぐれそうな溫か味を感じる、それは詩としての味ひが 溢れてゐるからと思ふのである。(二)の句はありのまゝ見たまゝを纏めた句にしたと思はれるが、それ丈けで充分句を生かし 先生始め皆さんが大いに話される樣な良い句としてある事は、句が持つてゐる處の全體の味ひが そこにあるのだと思ふ。

艸樂——これは鮎美君の下五の「泳ぐなり」が非常にのんびりした觀方である爲めに 災害の句としては迫力が無いのである。然し鮎美君の常の句が線の細い 華奢な然かも物事を美化してみると云ふ、同君の個性がこの場合にも出てゐると思ふ。この句は事實か否かといふ點を探ぐるよりか、事實として見て置

いて鮎美君の個性の出た句であると思ふ。

汀柳――艸樂さんが云はれた樣に鮎美君の個性による柔らかさが思はれ二句共非常に美しい調子に詠まれ過ぎてゐる樣に思ふ。雨迷君が(二)の句をありのまゝ見たまゝを纏めたと云はれてゐるが、僕は(二)の句に作者の技巧が多分に盛られてゐる樣に思ふ。兎に角兩句ともうますぎる感じがしてならない。

暴利取締令

救恤品後の男の手が長し　與三郎

路郎――流石にこの句の作者は川柳家である。自分が罹災者の一人であり、救恤品を受ける一人であつて、後の男の手を感じる丈けの餘裕を持つてゐる處が面白いと思ふ。

山雨樓――この句を客觀的にみても救恤品分配當時の混亂さが窺はれて、漫畫でもみる樣なユーモアな句境が表はれてゐる。

艸樂――救恤品でもいゝ譯だが、救恤品といふ總稱的の文字である丈けに多少概念的の感じがすると思ふし、この場合何か切實な品物の名前が何んかであつたれば一層情景が深く表はれればしなかつたかとも思はれる。

路郎――切實な品物で表はせば先づこの場合にぎり飯より外はない、然しにぎり飯でその切實さを出しては作者のねらつてゐる處がはずれて了ふ。この場合は寧ろ救恤品と云つた方がいゝ。

山雨樓――「救恤品」は寫眞で云へばパツクですね。

路郎――つまり作者の表現せんとするものは「うしろの男の手が長し」であつて、これまた手をねらつてゐるのではなくて其の人間と云ふよりは寧ろ世のあらゆる人間の心の醜さを詠出してゐるのである。

汀柳――米騒動の時の事など思はせられる句ですね。

大阪風水害

襷がけ涙ほど出る水を待ち　春光

雨迷――風水害の時に水が出なくなつたと云ふ事が、さしづめこうした句に表はれて居る。生活と水といふ事になつて居つて水がなければかなはんと云ふので奥さん女中がどれほど水に對して愛着心を持つてゐたかと云ふ事を句にしたので、涙ほどしか出ない水を待つて居る氣持がさうした災害に對する一つの覺悟、焦燥心とを相待つて、この句は當時の慘狀を如實に云ひ得てゐると思ふ。

山雨樓――叙法の上からは「涙ほど」はやゝ誇張の感があるが、當時の長屋共同栓のスケッチとして面白いと思ふ。

艸樂――私もよく場面は出てゐる事は感心するが「涙ほど」は少し誇張でもあるし、俚諺的な云ひ方である處に瑕瑾を認める。

雨迷――「涙ほど」が誇張であるとの言葉が出ましたが、私は水が出ないと云ふ事を云ふ爲めに、そこに「涙ほど」を持つて來たのであると思ひ、そうした事に餘り捉らはれてこの句を味ひたくないと思つてゐる。

山雨樓――さつきにも思つた事ですが、鮎美君の「鰯」の句、與三郎君の「救恤品」の句の場合、事實云々といふ事が論ぜられたが、句の批評に當り、事實の詮索は多くの場合句の味ひを殺ぐので避けたい處である。それのにいきなり事實の詮索に心を誘はれるのは、そこに句としての妥當性が疑はれるからではなからうか。春光君の句の場合は「涙ほど」といふ事に事實がどうかといふのではないが、雨迷氏が述べられた樣な批評とは違つた眼から叙法の點を懸念した迄である。

路郎――襷がけで共同栓であるとか、ないとかと云ふ處まで詮索する必要はない。そうした罹災當時の人物(女手)を表はしてゐるものと思へばよい。「涙ほど」が表現上誇張であると云ふ意見が出たが、誇張といふより誇小であると云ふ方が用語としては適切であるかもしれない。何れにしても二階から眼藥式の形容詞であつて、この場合にはこの句を味ふ上に雨迷君が云はれた樣に詮索を避けるべきであらう、極く穏かな表現法で纏めてゐる手腕を認める。

(於北澤莊　汀柳筆記)

武玉川二篇研究（八）

梅本秋の屋
森東魚
蛭子省二

（254）

脇の下から寒い羽この子

省二＝脇の下から出してくるところ、寒むそうな姿が描寫さる。

秋の屋＝この「脇の下」は、袂のことであらう歟。脇の下に羽子の子を入れておく事は有るまい。

東魚＝長い振袖を肩へなげ掛けるやうにすると、丁度八ツ口の邊をから手が出てゐるやうになる。その手に持つてゐる羽子に、イキを吹きかけてゐるやうな姿が思はれる。

（255）

送り火は他人の手にて燃上り

省二＝送り火は出棺の時に焚く火。身内の者は悲愁にとざされて、たき得ない。他人の手により葬儀は運ばれて愁く。

秋の屋＝葬式の出棺の時に焚く門火は、江戸の初期に於て廢れた風習のやうで、淨瑠璃の「菅原傳授手習戸」の中にあるがこれが出來た延享の頃には、都原では既に廢れて、田舎にのみ行はれた風習であらふと思ふ。

東魚＝他人の手でといふ處に、一しほの哀れさがさそはれる。

（256）

初奉公のこりるくらやみ

省二＝用事を命ぜられ、くらやみへ行かねばならぬ事は初奉公の少年には、恐しくて神經が締つてしまふ。一度でこりてしまふ。私も幼時の記憶を喚び起すものがある。

秋の屋＝朋輩などに惡戯をされて、大いに恐怖を感じたのであらう。

東魚＝何れにせよ、初奉公のたよりない心持ちが、「くらやみ」によく現はされてゐる。

（257）

よいおとこにも二通り大つゝみ

省二＝大皷をうつ姿態美か。雅澁な句だ。

秋の屋＝萬歳と才藏かとも思はれるが、それにしては大皷が不明である。「大包」ではあるまいか。

東魚＝男のよいと云ふのにも、只顔の美しいのと、又姿の美事なのとある。大皷を打つ姿のいかにも美しい事ではある、と

云ふ心持ではないか。

(258) **買人の手てつゝませる薺草**

省二＝七種の一つ。野生だから、いくらでも子供が採つてくる。「みんなではいくらに薺賣困り」で、買手に勝手につまゝせろ謂。判らう。

秋の屋＝七種の薺は江戸時代に、一文づゝ賣買したものであるから、「三文が薺を買つて叱られる」といふ句が有るので、至極安價なものである。

東魚＝安いもの、云はゞ値のないやうなものである上に、春の祝に用ふるのであるからと云ふ賣り手の和やかな氣分もあらう。

(259) **凩に買物使あわれなり**

省二＝凩ふきすさぶ折りに、買物の用事で外出させられる事は、かなりつらひ。（買物使即ち賄役なる一職制があつて、轉じて私共家庭での言葉ともなる）。

秋の屋＝手足の皸が凩に吹かれて、一層大きな口を明く。せまじきものは宮使か。

東魚＝平凡ではあるが、「あわれなり」と云ひ放つた處に、この句のよさがある。

(260) **戀しい時は猫を抱上**

省二＝狆でもよいかもしれぬが、猫の方が好材料だ。黑猫なら一層可ならむ。

秋の屋＝狆であると妾を聯想されるが、猫であると娘の方が適切である。

東魚＝娘であらう。

(261) **つむし風格子の前て二ツ卷**

省二＝格子前で、ほこりを立てて、消えてゆく、一光景を咏み得て居る。「二ツ卷」も可。（女の前であつたりしたなら、あくど過ぎて悪い）。

秋の屋＝平凡な光景を捉へて、一句にしたのは凡手でない

東魚＝同感。「二ツ」も單に口調から斗りでなく、實際であらう事が、この句の生彩あるところであらう。

(262) **疱瘡にうとんの桶も出して見せ**

秋の屋＝疱瘡患者は、よく赤色の物を好む故、朱塗の饂飩箱を出して、見せるのである。

東魚＝よく呑込めないが、恐らく前説の如きであらう。

省二＝然らむ。「桶も」とあるから。

(263) **郷侍の名を付る神**

秋の屋＝普通の農夫と異なり、郷侍は多少文字が有る故、新に奉祀した村内の祠に、何とか大明神と名を附けるのであらう

東魚＝相當地方的に勢力のある郷士の姓を、村の神に冠せて呼びなす場合ではなからうか。例へば梅本といふ郷士があるとすると、其村の明神さんを梅本明神などといふやうに。

省二＝然らむ。ケイに「先の地主の苗名呼ぶ神」とある。參考になる。

(264) **あみ笠の鼻につかへるむかう風**

秋の屋＝編笠の前端が、强風にふかれて内の方へ折曲り、それが鼻につかへるといふので、少し作りすぎた句である。

東魚＝私は作り過ぎと云ふより、實際かうした場合はあると

思ふ。古びた編笠などなら。そこに輕い滑稽の中に哀れさがあると思ふ。

省二＝編笠が吹きまくられて居る有樣は、充分出て居る。

(265) **座頭か出るとこほす居風呂**

秋の屋＝偶々自宅に來た座頭を、居風呂に入れたが、何やら汚く思はれる故、直に湯をこぼすといふのであらう。

東魚＝座頭が一番しまひ湯を、貰つたのであらう。

省二＝「出ると」と、待ち構えた氣配のあるのは、仕舞風呂を意味するであらう。

(266) **娘から手代の間は紙一重**

省二＝戀に階級別はない。娘と手代の事件は劇にも殘る。この紙一重が破れたなら……。

秋の屋＝この紙一重は、甚破れ易い。

東魚＝當時は相當にうけた句であらう。私は俳句とも思はないが。

(267) **よい日和子守をなふる松の影**

省二＝穩やかな好い日和に、松の影さす邊りへ、子守は遊びにくる。そして、からかはれる。俳諧式の手法だ。

秋の屋＝場所は街道の並木が、社寺の境内などであらう。

東魚＝境内の方らしく思はれる。

(268) **從弟夫孃の兩方に伯父**

省二＝これは當然なわけだ。前句の興趣から詠まれたもの。（近時、斯種の結婚が遺傳上弊害なしと言はれ、流行氣味がある由）。

秋の屋＝當然過ぎて詩味が缺けてゐる。

東魚＝當然であるが、何かなしにおかし味がある。私はユーモアを感する。

(269) **町のはつれて仕廻錫杖**

省二＝町端れとなつて、人家もなくなつては、錫杖をふる必要もなくなり、仕舞はれる。（錫杖には長いのと、短いのとあつて、修驗者などは、短い方を用ひて居る。祭文語りの句とも解れぬ事はない。「錫杖を四五本をごる夕涼」これは祭文を詠むだ句）

秋の屋＝昔の修驗者俗に法師といふ者であらう。前解の如く祭文語にも動く句である。

東魚＝町はづれで虛無僧が尺八を吹きやめると云ふ句があつたやうに思ふが思出せぬ。

省二＝「尺八でつつぱつてみる町端れ」と「茶飯屋の前で尺八仕舞ふなり」を、合せたような句ですネ。

○望樓之篇

(270) **吉次か供のしたい事する**

省二＝「花のさく國で金商人も出る」。吉次は金商人であつたから、供も懷ろ景氣は好かつた事であらう。

秋の屋＝鏡の里の遊女なども買つたらう。

東魚＝都から奥州くンだり迄出掛ける、金賣の事だから、隨分ボロイ儲けをしたものであらう。從て供の者も懷が暖かい。

(271) **狼の命拾ひは寒のうち**

秋の屋＝狼が獵人に遇はずに命拾ひをしたのか、旅人が狼に遇つて、其處で命拾ひをしたのか、甚曖昧な句である。

東魚＝難解句である。駄勞解を許してもらへば、狼は他の獸

をとつて喰ふものであるから、寒の内に獸肉を喰へば、人間なら藥喰ひと云ふ次第で、あの疲せツぽちの狼が寒の内の獲物で命をつなぐ事であると云ふ、洒落氣分の句かと思ふ。

省二＝狼が獵人に遇はなかつた方に解してゐた。狼春夏出山家、竊食鳥獸及人物、秋冬穴居だから。

(272) **今かよいとは言ぬ後添**

秋の屋＝前夫よりは數段立優つた良人でも、滿足に思はぬのが、愚痴の女の常である。

東魚＝元木にまさる末木なしと云ふ心持。

省二＝複雜な感情だ。

(273) **燃る間を柄杓て扣く八重葎**

秋の屋＝葎生の庵の門を、巡禮がきて柄杓で叩くので、紙燭を點して出てみる、とでもいふ句ではないか。意餘つて詞足らぬ句だ。

東魚＝句面からみれば、燃ゆるものは八重葎としか思はれない。おどろに枯れた草叢を燒くのに、餘り火勢が强くならぬやうに柄杓で扣き伏せ、扣き伏せ燒き盡すと云ふ場合かと思ふ。

省二＝燃ゆるものは、八重葎。消すのだから、柄杓が用ひられる。遂に叩く道具にまでも。

(274) **給仕の顔の遠い住吉**

秋の屋＝不可解

東魚＝駄勞解を試みれば、例の住吉の遊女の田植を見物にきた人々の食事の席へなど（或は茶の給仕でも）出る女が、美しい遊女達を見た人々に對して氣をくれがして、遠ざかりがちでゐると云ふ心持ちかと思ふ。

省二＝暫く預つて考へてみたい。

(525) **辛崎は狐火までも朧にて**

省二＝「辛崎の松は花より朧にて」（芭蕉）をふむ。「狐火」は夜雨との單なる關係であらう。從て朧にてを活かす策。

秋の屋＝芭蕉の句を換骨奪胎したまでで、作者の智慧の廻らぬ句である

東魚＝狐火は蛭子氏說の如く、夜雨との關係丈けに取入れたものと想像する。一句としても意味は完了してゐるが、其味は矢張り前句に照さなければ不充分なのであらう。芭蕉の句をふんだ所以も、前句からの響かと思はれる。

(276) **人の物着て夜の岩倉**

省二＝岩倉祭關係の句。

秋の屋＝京都北山の岩倉神社の祭禮（九月十五日）の夜、村内の新婦を撰んで、神饌を奉らせる時、群衆が木の枝を以て、新婦の尻を打つので、人の目につかぬやうに、他人の衣服を借りて行くといふのであらう。岩倉祭を俗に尻叩祭ともいふ。

東魚＝前說動かぬ處と思ふ。

省二＝婚禮の際の服を着せるとなつて居る。だから「人の物」が興味となるであらう。

(277) **そむけて糸を結ふ綻ひ**

省二＝背ろむきになつて、綻びたところを、一寸結むで置く女らしさがある。

秋の屋＝他人に脊を向けさせて、女が綻び（裾か尻の邊の）を縫ふのではない歟。

東魚＝袂の八ツ口などが綻びかけたのを、一時假に糸をとめて置くのであらう。其前段に戯談事でもしたやうな、場面が想像される。

(278) **酒買時に灯のうつる川**

省二＝灯ともる頃――その灯が川に映る、夕暮は世間が、しばし靜まる氣味がある。寸度酒を買ふ風趣に添ふものがある。

秋の屋＝枚方のくらはんか船とも思はれる。

東魚＝ただ句面からの情趣を受取れば、いいやうに思ふが、どうも充分說明が出來ない。

(279) **阿部川て人と思はぬふとり肉**

秋の屋＝駿河の阿部川も滿水の時は、徒渡りが出來ぬ故、川越人足が出て旅人を渡すに、その人足が肥大漢を罵るといふ句であらう。

東魚＝東海道名所圖會に、「大井川と双ひて步渡りの大河也滿水の時は河止あり云々」とある。テブは荷厄介にされた事であらう。

省二＝阿部川の川止を餘り話題にせぬようであるが「阿部川が止まるゝ餅も胸つかへ」。「おぶさつて幾らでやると餅をくひ」は、川止川明の句である。

(280) **高野聖も金の明るみ**

秋の屋＝高野聖は、高野山の下級の學僧である。が、「金の明るみ」は不明である。

東魚＝諺に「高野聖に宿かすな、娘とられて恥かくな」と云ふ事がある。が、金の威光では泊めて貰へると云ふ意味合ひを「金の明るみ」と詠んだものと思ふ。

省二＝すると「金の明るみ」は、消極的な「金に明す」の謂なるにや。

(281) **遊ひ盡した人を後見**

秋の屋＝浮世の辛酸を嘗め盡した人を、後見人に立てるのである。

東魚＝遊び盡して飄然として、堅く締つた人は、全く確かなものである。

省二＝遊び盡した人は、話が早判りする。よい後見人である

(822) **伽藍の雨戸晝過にくり**

秋の屋＝參詣者の尠い大伽藍では、毎朝雨戸を明ける必要がない故、漸く午後に到つて明けるのであらう。

東魚＝伽藍に雨戸といふものは、あるまいと思ふ。「くり」と云ふから普通の住宅の雨戸のやうに、次ぎ〳〵に繰り明ける事であらうが、伽藍は多く折疊式の扉のやうに思ふが、どうも變に考へらる。

省二＝折疊式許りとは限らぬやうに思ふが如何。

(283) **朝貝くらく馬の髮結ふ**

省二＝朝、顏くらく(早朝)か。朝顏(花)くらくか。いづれにしても句意は同じにとれる。朝早く起きて馬の手入れをする。髮を結つてやる。馬を飼つた者は經驗するところだ。勞働者は馬が財產だから、仲々大切に可愛がる。

秋の屋＝鬣を結ふのは、大名などの乘馬で、駄馬には無い事であるから、「朝貝」は牽牛花でなく、朝・顏暗くである。

東魚＝朝・顏くらくと云ふやうな句法は、當時どうも平氣でやらないと思ふ。朝顏(花)だと私は思ふ。朝貝が咲くか咲かぬかの未明に、馬の髮の手入れをすると丈けでよろしいであらう(追記)金砂子に「馬の髮結ふ內汁は煮へつまり」を發見して、矢張田舍の景と解すべきものとの自信を强くした次第である。

(284) **嚙む爪も極て居る物思ひ**

省二＝物思ひに爪をかむのは、演出効果は充分だ。どの爪をかむべきかは、體驗してみらるる事だ。起つてゐて嚙むよりは坐つた方が物思ひに優しさがあるやうだ。

秋の屋＝德川家康は戰場に臨むで爪をかむ癖があつたと云ふが、尾崎紅葉は執筆する時に、右手の中指の節をかむ癖があつて、其處に胼胝が出來て居た。

東魚＝「物思ふに爪かむ癖も夜寒かな」と云ふ句を數年前ある俳句會でよんだが、何だか燒直しをやつたやうな氣がして、我乍らヒヤツとした。

(285) **庵の主聞へる方の耳を出し**

省二＝庵主の老人の、思邪なき安泰さも窺える。

秋の屋＝私なども右耳が聾したので、左耳を出して、人の言語を聞くのである。

東魚＝並んで話をして行くと、聞える耳を近くの方へ、入れ替つたりする人がよくある。

(286) **我家へ漏をあてゝ雨乞ひ**

省二＝雨乞に自家の漏るのに用意をして置くとは、寧ろ眞劍だ。こんな事も雨乞効果を顯著にせしめるのかも知れぬ。雨師も興をや覺ゆらむ。

秋の屋＝作意に過ぎた句である。

東魚＝成程作意にすぎるかもしれぬが、可笑しさはある。滑稽味を受取れば救はれる句であらう。

(287) **寺の余情に匂はせる蓮**

秋の屋＝寺院の境内の池に蓮が有ると、いかにも餘情がある

東魚＝餘情は「なごり」と讀ますのではなからうか。さすれば蓮池の蓮の香にしみて寺を辭しても、蓮の香が失せやらぬといふ心持ではないか。

省二＝餘波をナゴリと讀ませ、又餘韻をもナゴリと讀む場合がある。餘情をナゴリとするならば、東魚氏說尤も妙。單に餘情とせば、秋の屋氏說に落ちつく。前句が欲しい。

(288) **烏帽子の跡の伏見まて見へ**

秋の屋＝歷史的の句かと思へど、今遽に思ひ出せぬ。

東魚＝「跡」と云ふのは、後姿の意であらうか。些變に思はれる。

省二＝？

(289) **門口へ野分の屆く住居也**

秋の屋＝曠野の中の一軒屋である。

東魚＝遮ぎるものなく、野分が吹き當る氣分を「門口へ屆く」と、興じた點がヤマである。

省二＝「門口」と「住居」に、多少重復味がある。私なら門口をいかし、住居と言はずに、作る工夫をする。

(290) **初雪のつまみ心もなくてよし**

秋の屋＝雀の三里迄では、ちよつと撮んでみる事も出來ない

東魚＝平淡にすらツと云ひ放つてあるが、恐く前句の調子に應じての作者の苦心があらう。

省二＝初物は少い程有難味もある。初雪を盆にうけてみるといふ古川柳がある。「つまみ心」などの詞が一寸氣付得ないものだ。

この頃の私

食満南北

△「魚」といふ雜誌を編輯した。さうして「春の卷」の爲に諸先生に原稿を御依頼して見ると、私のやうなものに對して、甚澤山な玉稿を賜はつた。全く意外な方から頂戴した、私は實際嬉しかつた。さうして私自身も亦つまらない稿でも、若し望まれる方があれば、寸刻も早く描いてお送りしなければならないと考えた。といふのは、かつてから何か描け〳〵と云はれてゐながら、其儘になつてゐる方からの玉稿を拜見して、全くそぴらに汗を覺えたからである。

△私はかつて松竹座の「春のをどり」に「春のおどり」と描いてしまつて方々から、おはをだとの注意を受けた。しかし「をどり」より「おどり」の方が、字から受ける感じがよいといふので、とう〳〵痩ガマンをはつて「おどり」で通してしまつた。處が大阪劇場へうつゝてからは私は何の關係もなくなつた。すると「秋のをどり」といふ事になつてしまつた。私は何だか妙な字を見るやうな感じがした。さうして私に關係のない「をどり」だと心から思つた。

△東京の高島屋で個人展覽會を開らいた。都新聞の評に、畫は達者だが句は下手だと、これにはハツとした、繪を描いた上へ何にも考へないで、ツラ〳〵と書いてしまふ癖がある。つゝしまなければならないと深く後悔してゐる。

△子供といふものを持つてゐない私は、よく路郎兄から、子供の事に對しての意見には大いにケンカクがあると云はれてゐたが、鞍馬氏の愛娘に對しての小冊「白い花」を贈られて成程と感じた、と云つて今更子供が出來ても困るとは内に思ふてゐる事だが……

△亂耽が來て、添乳しての畫と句を描いてくれといふ、何にするのやと訊くと、早く子供が出來るやうに……私はソツと亂耽の顔を見上げた、若いくせに、……と思つた。

△かう描いてゐる傍を小さな、うちの仔猫が生のこりの蠅を追ふて走りまはつてゐる。

北澤莊から

山本雨迷

「北澤莊から」を本號から掲げることにしたが、此の書きなぐりを書き續ける氣持は決して「たまむし」時代と少しも變つてゐないことにある。

また變り樣がないのである。もと〳〵川柳から脱しない限りは、斯うした憂ひが其の間に殘されたとしたら、それはおそらく、柳界を一つの營利會社の樣に見たとしか思はれないのである。と同時に一つの仕事をする上に、況してや詩を扱ふ者として、そうした事であれば初めから、物の見事に、川柳たまむしを廢刊なぞはしなかつたであらう。

其後柳界の皆樣から、川柳たまむしの廢刊について、愛惜の文字を多く拜受した、が何れも、そうした事の感じがほのかに見えてゐたので書いて見る氣になつたまでゝある。

勿論、「たまむし」の存續を望まれたものが多かつたのは云ふまでもなかつたがたまむしでやつて來た事は、本誌でも大いにやることになつてゐるから、その邊の御配慮は恐れ入るばかりである。

作句發表のことにしても、たまむしとの從來の關係の人々に就いては相當の考慮を拂ふつもりでもあるから、大いに御投稿を願つて置く。

× ×

さて、本社の人々は以前から知友の人々ばかりで、潑溂とした空氣が横溢してゐるのは路郎師の爲人によつて明かであるのであるが、本格的な川柳人として勉强するにはもつて來いの雰圍氣が醸成されてゐるから、私自身としても大いに期するものを感じてゐる。

今後の御叱正を願つて置く。

× ×

柳界といふものは兎角御機嫌住居に終始せぬとおさまらぬらしいが、川柳の動向にしたつて、行くべき方向へは作句そのものが示しはするものゝ、適確に定めて行くものは、柳界の無形の力が支配するので、殘されて行く「句」が目下の柳界を物語ることになるのである。

私達は此の殘されないであらう句を幾百萬句作つてゐる中に殘される句がそこに生れてくるのである。私達はこの殘される句を作る爲めにのみ勿論作句してゐないのであるが、川柳を愛着するこゝろは、全的對照として恥かしくないものを川柳に打ち込んで行かうとするところにあると思つてゐる。

川柳塔

路郎選

風水害（二句）　住田亂耿

何もかも流れゆくさま見て逃げる
うらむ氣になれぬしづかな海に立ち
木枯に陰慘な灯とゐる巡査
村政をつかさどる身の頰冠り
旅愁搖れまさり牡蠣船灯が更ける
エッセイをよんで獨りの良さの夜

亡父追憶　生田翠夢

いかなごに父むつつりと箸をつけ
頭目の憤滿櫂を仕立てさせ
櫂から降りて親愛な髭を見せ
獸心になつて戰く妓とたわけ
貞操を投げ出してゐるその强味
手弱女と云ふ名に恥ぢぬ座りやう

城崎にて

湯の町の川に湯氣ある室に座し
神の業ちらりと見せた玄武洞

天橋立にて

記念寫眞水兵さんがまじつてる
龍宮へ行く道だつた與謝の海

西田艸樂

食堂の鏡三人俺が喰べ
流れ〳〵消え行く泡の操かや
蠟つくによい場所易者見つけたり
目覺むればセルと袷が替てあり
脅かされた動悸を三味の胴で押し

夜嵐の梢騷がし夫んで寢よ　山木丹路

紙の白さへまけてしまふて心足る
學校の裏を見ながら住みほうけ
忘れてもかまはぬとこへ忘れもの
惡趣味のうちに政治もいれておけ
愛人といつしよ赤新聞は買はず
特急に乘つてをんなのあとを追ひ

橋本綠雨

事務所移轉に際して（十一月八日）

かたづけた二階で秋をむさぼつて
整理する二階で反古の二抱え
責任が輕くなれば惱みおほし

鶴峰君に招待

呑めるなら燭臺のある室もよし
氣短かに暮らせばあれはどうならう

阿部閑生

倒れ木に夕日からんで冬に入る
訣るゝ日言はぬ言葉の胸に活き
けだものに女の化ける候となり
寢覺め癖ついた枕の窪みやう

闘本雅幽

病身へ水災

逃げて死に流れて生きた話なり
名月へ出て紋付きをすゝぐなり

綠雨氏へ

匂へども菊に副ふべき草のなし

朝田新水

本意ない別れ女給は身持なり
この家に槍あり先祖の名を揭げ

○　大鶴喜由

見しらぬ人から欠伸ゆずりうけ
利子ばかり拂ひ五十の春がくる
質草のまだあるうちは人らしき
凝りもせぬ肩を新嫁もみたがり
水かけて花屋は今朝の露にする
始末しませうと新妻またもろみ

頬かむり雁次郎さんの鼻が冷る
生くるべく年期へ娘發たせり
獨身時代の柄をむつきの數に見せ

吉田　水車

颱風へ菊の安否をたづねて來
投書函さてお氣付きの點ばかり
大阪でゲームセットの笛を聽き
秋晴れへ隣の留守を賴まれる
旗立てゝともかくホテル出來上り
惡いくせ到來物を値踏みする
おしみなく秋は晴れたり家さがす

六花撰

江戸を賣るわらじの紐をたしかめる

中澤濁水

父も父娘も娘戀は戀
喫ふ煙に緣談二つ迷はされ
引止めて兎も角目刺からはじめ
疊屋はそれに懸けさせ手を止めず
取るものは取れずに拂ふ霜を踏み

お蔭樣でつんぼでゐます母が來る
孫兒まで奉公はさせぬ目をこすり

市塲洩食子

眞中にテリヤを入れて夫婦寢る
叱られに行くノックなり社長室
上役にまた標札を書かされる
捨石に僕がなつたろ獨り者
世話好きが休暇をとつて出掛けたり
善人だけど伯父さんは金がなし
空想も早や老境で慘めなり

丘遊舟

影ふんでまだ愛情にふれてゐず
拾ふたも捨てたも闇の氣まぐれよ
つゝましい拍手がながい婦人席
閑あれば後悔多し十二月
あはれあはれ青空を見る閑も無し
この父にヴエートーヴエンの好きな子よ
理性忘れず事務的な文

姫田夕鐘

春園治逝く

笑はしにながい草鞋をはくのなり
向ひ雨傘の裾からおんななり
新妻の手許くるうた海老フライ
秋ふかくもろみの朝の膳につき
どんたくがうれしく背なの骨がなる
まないたのまるみとともに世帯めき

西村明珠

靴直し表門から覗くなり
三越が來て開けるなり表門
支拂日五日と書いて水を打ち
藥のむ間に四五間づゝおくれ
上戸黨いへない事を言ふてやり
去年からゐる下女炬燵はつてくれ

石曾根民郎

親戚の葬儀に列す

火葬場に待てば夜汽車は山向ひ

神經衰弱性の母

盃にそゝぐ藥は音がある
辻說教まともに月の出を引いて
町内で片付く友に拘はらず
夢枕何が立つのか寢てしまひ

日野華水

宿がへのいつち了ひは竿を持ち
塵取りの中で王冠光つてる
横櫛の女に道を聞かれたり
日本中寢たなと思ふ頃に醉ひ
釜の漏り顏をすつかり入れて見る

石丸晴朗

淋びしさは馴染も共に年を取り
こゝをこう持つて歸へれと一升壜
學校を拔けると父が失敗し
大の字に寢て初戀を淋びしがり
あさはかな妻の嫉妬が子に當り

後藤青兒

失戀を柘榴が笑ふだけの事
子の自慢息つぐ暇もなく喋り
斷髮が先になつてるハイキング

洋裁の話大阪までつゞき
甲板で日の出拜めば船も着く　喜多春秋

明日死ぬにしても今日を食はねばならず
ものいふてやれば年寄り喜んで
體操の眞顏いちばん脊が低く
秋の日に書家の氣骨の老ひの膝　平井春光

風水災後一ヶ月

壁塗つた翌る日家賃とりに來る
秋の夜を泌みぐ〳〵ロハのラヂオ聽く
寄りかゝる女給へ上衣脱ぐとする
桃割や婚約濟と知らざりき　毛利九波

消費者に甘んじてゐる虛無主義者
いつはりて酒酌む日なり時雨する
許されて女詩集など買ひぬ
純情を盜みて女去り行けり　青木史呂

君・悔ひはなきかとばかり落葉する

靜太君來訪

かばかりの道に耐へ得ぬ君なりし

實兄居風水被害甚大

諦めはせめて命のあつたこと
すぐ來いに來たに何にも云はぬ兄　尼絲之助

三瓶登山（三句）

裾野は展き陽のあるところないところ
眼の下は山ばかりなるうれしさで
高原の秋放牧のなつかしさ　平井與三郎

愛人に母なく僕は父持たず
何もかも知つてる母の目と出會ひ
おちぶれる事が嫌ひな母を持ち　西いわを

終迄聞かず座を立つ組頭
落城の樣に赤玉のひる

疊程良きものはなし寢轉ばん　渡邊曉童

いつち ひまなが 風呂たきをする
お座敷のうんこへみんな手を借られ
ポツポ船 此處も祭で 此處も着け　奥野禿山

緣談をみな斷はつて眼鏡の娘
弟の世界壹等水兵なり
正直な生徒 校舍が恐はくなり　首藤竹楓

頂上でうつす寫眞へ風が鳴り
ソフアーへ退屈といふ顏でなし
時間切迫 まだ氣のすまぬコムパクト　越智虹子

男親御飯のたける子と暮し
質草のあての指輪が拔き取れず
まだこんな子がありますと白髮染　宮岡白峯

水筒へ軍人すきな歌で來る
五六回十二時がなる街でした
忘れてはならない子等の着物です　中島鐵洲

柿の實は眞赤大演習終る
足弱な母に話の途切れたり　植山九天

花園にて
貴賓席からスクラムが遠いなり
動物園
ふりそでのリタをうらやむ人もゐて　荒井英賀夫

くろうとをくどきそこねてよいねする
はら〳〵と落つるは涙だけでなし　近藤勇

秋好む女やつぱり内氣なり
今日からは一つ缺けたる母の膳　岡龍三

待つ人へあの町この町灯が點る

三鴨　美笑

思ふまゝ言はせて頂戴酔つてます

山本　雨迷

朝寝坊の追憶となる日は人も來よ
はて夢はエンヂンの律動を知らぬかに
相默して霧雨の情れなき灯に坐る
亂れ咲くコスモスの野趣の横顔
天に聲なく木枯となるおびえ

増位　汀柳

ちぎれ雲しきりに飛びて戀を斷つ
虫眼鏡こゝろにあてゝ獨り居の
逢はゞまた明日が苦になる君なりし
襟足をほのにほはせて湯を出でし
散らばれる密柑の上に子は踊り
美しき人に折られた山茶花の
なで肩に黒の羽織の似たるかな
はてもなく求めし戀は人妻の
亡き母の老眼鏡をかけてみぬ
亡母に似し人あり戎橋に立つ

粒々集（その一）

御影　長崎　柳秀

遠慮なくいたゞく猪口は脚を組み
大阪の電話は女房それと決め
想う瞳へをぼろ月夜は唯わびし
氣儘でも過せる母とスター居る
先輩は時勢と云ふをくどく說き
わかつてわかつてかとウエイトレス
廣風は夢うつつなり廓なり
貧乏と見られとむない義理を出し

川柳二十日會にはどなたでも出席出來ます、毎月二十日の午後から夜にかけて不朽洞一南海鶏玉出驛西三丁キング喫茶店で話郎主幹を中心に語る會です、會費の定めはありません。

今日の會は山本雨迷さんと増位汀柳さんが第一着、皆さんがまだお出でにならないので、汀柳さんはAテーブルの上へ紙と萬年筆を擴げられた。萬年筆と紙これはデスクを前にした汀柳さんのつきものである。

私と純子は大急ぎで壺の花を入れ替へた。アスパラガスの纖細な葉へ、カーネーションの強烈な赤が燃えて、バックの壁はます〳〵純白に輝いた。

灯ともし頃からぽつ〳〵とお顔が揃ひ出した。Bテーブルへは與三郎さんと夏光さん、其向ひが商賣の途中だと云つてライト御持參の夕鐘さん、Cテーブルへは前夜の豫告通り遲出の史呂さん、其向ひが禿山さん、山雨樓さん。今日の珍客正光さんは雨迷さん　汀柳さんのテーブルへお仲間入り、大火鉢を前に陣取られたのは艸樂さん、時計を忘れて來たので遲くなつたのだと云ふ前提だつたが、唯に時計のみならず、艸樂さんのシムボルともなるべき袋も、左の手にぶらさがつてゐなかつた。かほるさんは艸樂さんの後でしよんぼり、かしこまつてられた、長襦袢で踊れるほどの雰圍氣にもなりさうでもなかつたので一番先に退去された。次に夕鐘さんが歸られた、入れ違ひに森立名さんが御出でになつて、夕鐘さんの椅子へつかれた。山雨樓さんは謠の會の下稽古があるからといつて、これも早くお歸りになつた。今日は正光さんに御自分が經驗された戀のエピソードでもといふ誰かの申し出でがあつたやうだが、話されたものか其まゝお流れになつたものか惜しいかなコツヵ場で働いてゐた私は途に拜聽出來なかつた。

來月の二十日會は、例年のクリスマスイヴのように關東煮で呑んで頂き、川柳福引でもやつて華々しい景氣をつけて、お互の年忘れに替へたいと思つてゐる。（葭乃）

第五回の二十日會は葭乃が書くことになつてゐたので、僕は付の手控でしかあり得ない。ナンジヤ、せんぐりやつて來たこと、その座席と、せんぐり歸つて行つたことしか書いてないぢやないかと云つたら、ソレでも、話を聞くひまがなかつたので、それだけしか書くことが無いのだとアッサリした返事だ。

ナールホドと感心してゐてはこの頁が埋まらない。兎に角、一時はピンポ　の話、芝居の昔話があつたが、僕もポンヤリと聞いてゐたし、ポンヤリと喋べつてゐたので書けない。汀柳君にも頼んで置いた筈だが、汀柳君にもうまく逃げられてしまつた。（不朽洞主人）

本社客員食滿南北氏の**南北新作春掛展覽會**が十二月一日から六日間、南海高島屋の七階サロンで開催されます。即賣もするさうですから、せい〳〵お買上げ願ひます。ホメルだけで買はないのでは、南北さんはよろこばないのですから、その點お含み下さい。

安心してゐた。とこころが偖原稿が出來上つて讀んで聞かして呉れたところによつてツラ〳〵按ずるまでもなく、これでは受

武玉川二篇の句解に就いて

梅本塵山

本誌十月號の「猫々莊瑣談」に、「武玉川二篇研究」中の句

三疋ではねれば馬も詠あり

に就いて、これは「狆わん、猫にやあちう、金魚に、放し龜云々」とある繪草紙の中の馬ではなからうか、と正岡君は述べられたけれども、此の解釋には少し疑義がある。

私の記憶する所に據れば、江戸の末期すなはち慶應二三年の頃、尻取文句と稱するものが大いに流行したが、それが明治に入つて稍廢れて、其後に「狆わん、猫にやあ、ちう」の一枚摺の繪が流行したと思ふ。されば「武玉川」の出版された、寛延三年の頃、既に此の繪が存在して居たらう歟、大いに疑はしいのである。私の稽ふる所では、明治維新の前後に初めて出版されたものやうだ。近頃、某氏がある新聞か雜誌に、此の繪の中に「金魚に、放し龜牛もう〳〵、小僧がこけてゐる云々」とあるが、「こけてゐる」といふのは江戸語でなく、京阪語であるから、最初は京阪地方で出版されたものだ、と述べられたのは、傾聽すべき說で、江戸よりも先に京阪地方に早く流行したものらしいが、それにしても、寛延時代の古いものと思はれない。

此の繪は柾紙一枚に碁盤目の罫を引き、その一小間に狆、猫、鼠、金魚、龜、牛、小僧等の圖を繪描き、その圖に「ちんわん、ねこにやあ、ちう、きんぎよに、はなしがめ、うしもう〳〵こぞうがこけてゐる」などゝ平假名で書いてあつた。正岡君はこれを童謠と云はれたけれども、前に述べた尻取文句よりは一層幼稚で、尻取文句の方は口に謳ふこと主としたものである故、

汐所

西之町より上汐町に移つた爲めに、緣雨さんよりこの欄を讓られました。緣雨さんと同樣な御支援を願ひ上げます。

上汐町は以前東平野町と稱されたのが、俗に汐町と云はれてゐた所丈けが五六年前より改稱されたのです。事務所は大阪市の高所にあり、この邊は三越の天ッぺんより高いのです。それでこの一體の總稱は上町と云はれてゐます。その中でも事務所の南の辻が大阪市中で一番高い土地であるのです。土地が高いだけで地價が至つて安い所で致方がありませんが。事務所はこの町並に不釣合な洋式の外觀を添えて近所に氣兼れして建つてゐます。然し私はこの家で生れ、私の父もこの家で生まれたのですから人間はこの町並に相應しく出來てゐるつもりです。

事務所へは路郎先生も毎日午後に出勤をされてゐます。私も新聞社へ出る以外は在宅

紫色の一遍摺であつたが、狆わん猫にやあの方は、畫圖を主としたものである故、四五遍摺の粗雜な繪であつて、童謠ではないのである。

尻取文句の方には、「桂文治は囃家で」「昊絽に羅紗の筒ッぽう」「當時はやりの宇左衛門」「山崎權ちやん河原崎」などゝいふ文句があるので、其の創作された時代が判明するけれども、狆わん猫にやあの繪の方には、少しも時代色が表現されてゐないから、其の創作の年代が判明しない。萬一、此の繪が寛延の頃より存在したものならば、喜多村筠庭の「嬉遊笑覽」に掲載せらる可きだが、同書に掲載されてないのを見ると、明治維新前後の創作とする外はなく「武玉川」の句は此の繪に關係が無いのであるが、後日、寛延の頃より存在してゐたと云ふ、文獻の徵すべきものが有つたならば、夫れを提示されん事を祈るのである。

男の親は女の爲にも親也

安川久流美

「武玉川二篇研究」に就て、又下手な横槍質問を發する。

(228) **けいせいの親に逢日は雪か降**

該句に省二氏の評が適評に近い、他の二氏は餘りにも新解釋を加へられて居らるゝやうに思ふ。

私の案するところを左に述べて見て省二氏より再檢討を承り度い。

流連の客が傾城の實親に？あふたのでなく、寧ろ女が情夫の親にあふた雪の日である。それは省二氏の謂はるゝ如く「劇の一場」である。即ち彼の「梅川忠兵衛大和往來」新口村の雪の場面

する樣に心掛けてゐますので、同人の方は勿論、川柳家の皆樣の御來社を嬉んでお待ちしてゐます。尙二階に三十人位、階下で五六十人の集りが出來ますので、句會にも精々御利用下さい。

本欄のカットは路郎先生の筆を煩はしました　—江柳—

▽福田山兩樓君は五日公用を兼ねて伊勢大神宮に參拜されました。

▽山本丹路君は二日店の運動會でお江戸見物をされ五日歸阪されました。

▽生田翠夢君は四日城崎、天の橋立方面へ一人で出掛けられました。

▽山本雨迷君は今般株式會社合成化學工業所の監査役として就任されました。

▽藤里好古氏は夕刊大阪新聞紙上に「維新勤王史蹟巡」を連載されてゐます。

▽長崎柳秀氏の令息仙之助さんは御病氣快癒元氣で登校される樣になられました。

▽食滿南北氏　十二月一日より六日間の豫定で大阪南海高島屋に於て南北個人畫展覽會を開催されます。尙畫は即賣されますので精々御買上げを祈り上ます。

であらう。梅川が戀する男の父親（舅）が、雪の爲め下駄にバクがつきこけんとする時、梅川が飛び出して忠兵衛の父を抱き起すといふ淨瑠璃文句に悲しいシーンがあるのです。

無論「貴の情景」ではあるが、古句の表現の拙さの爲め曲解されるのである又傾城が傾城自らの親に逢ふたとすれば「の」が「が」になるべきテニオハ研究に到達しやうが、秋の屋、東魚兩氏の說は新しい解說と思ふのである。「大和往來」の舊芝居を參考して下さい。

（十一月十日記）

凡人の言葉

辻いの助

自惚は劇藥よりも怖し

×

話題を持たぬ人間は他人の惡口を樂しむ

×

ルンペンやスラム街の作品を書く作家がブルヂョアの息子だつたり

花柳小說作家が君子人だつたりするから世の中は妙なものだ

×

適材適所——萬歲師が舞臺の通りのしぐさを街頭で演づれば狂人扱ひにされる

×

臺所と俳優の素顏とは似て非なり

×

同情といふものには流行性がある

×

藝術家らしく、篤學者らしく見せかける人間には概して喰わせ者が多い、そして「馬鹿みたいな男」が意外な篤學者であつたり、藝術家であつたりする

▽川柳紫會・名古屋は今回同人總會の結果都合上紫會解散と共に紫誌十一月號を終刊號として廢刊を宣せられました。

▽安井ひろし君は九日より湯崎、白濱に行かれた便りを頂きました。

▽竹田花川洞君は十四日本社事務所を訪問されました。

▽富士野鞍馬君は八日京都に行かれました祇園の妓高雄の坂で見返へられ鞍馬

▽信州湯田中の有爲郎君より柳風會を訪問された東京の三太郎、衞十、啞三味、陣居の四氏より寄書を頂きました（二日）

湯田中所見

山向う母の生れた國の雲　陣居

大湯にて

熱い湯に江戸ッ子我慢して這入り　衞十

善光寺にて

御階段めぐり出口で眼をつぶり　啞三味

▽岡田某人君夫妻が東上され川上三太郎氏居を陣居・啞三味兩氏の案內で訪問されました（一日）

茶をすゝる音東京の雨もよし　某人

▽本社今治支部幹事渡邊曉童君令孃曉美さ

から才モシロイ

×

金持の親戚を誇るといふことは最も愚劣なことである

×

弱り切つた人間に大聲叱呼するよりも一杯の水が必要だ

×

讃へるといふことはある場合に媚びるといふことになる

粒々集（その二）

大連　大島濤明

ブランコに秋の日脚のちと殘り
人工を笑つて野菊咲き誇り
心臓の皷動へ泌みる雁來紅
收穫へ案山子の勞は放つとかれ

舞鶴　安川久流美

十二月初旬菊あり應接間
獨り寢る味をおぼえた十二月
十二月二十五日も日の御旗

東京　正岡蓉

トマト喰べてる病みがちの妻
竹割らぬ氣性で女蕩し也

ん誕生歡びの夕より寄書を頂きました。（二日）曉童　宵光、槍さび、小松、心府、小樓

▽高澤一涙君（布哇ホノルヽ）より風水害見舞金として二十口の醵金を頂きました厚く御禮申上ます。

▽塚越正光君は今般大阪の婦女世界社に入社されました。

▽番傘川柳社では「番傘自選句集」を刊行されました。

▽劍花坊追悼全國川柳大會は既報の通り十八日全國の吟社共催で盛大に執行されました。

▽京都川柳聯盟より「川柳忌句會詠草」が發行されました。

▽川柳倶樂部社より和田天民子著の「非常時の川柳」（價八十錢）が發刊されました。

▽黑木鵜足君の令閨たけ子さんは十五日午後永眠されました謹んで哀悼申上ます。

轉居

▽岸本水府君（大阪市天王寺上本町十丁目三八）▽富士野鞍馬君（東京市杉並區高圓寺六八五）▽石田沐天君（大阪市西淀川區浦江上二丁目五七）▽柳樽川柳會、井上信子さん（東京市中野區大和町二八二）▽川柳むさしの編輯所（東京市麹町區下六番町四八寺井紅太郎君）

日本名所名物川柳

大阪の卷

麻生路郎選
大西長三郎畫

（十七）淀川、安治川、木津川

淀川だけで終る船頭　山雨樓
淀川へ橋の高さの糸を垂れ　亂耽
淀川で釣れぬ同志が雲を賞め　豆秋
淀川の水に工兵うつるなり　舟人
淀川の聲旅行團立ち上り　萬よし
網棚へ立ち淀川を渡つてゐ　春秋

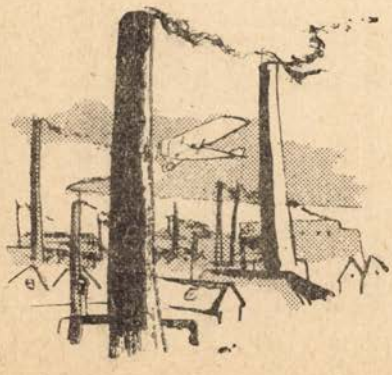
×

安治川をにぶい汽笛で船が出る　艸樂
渡船から見る安治川に浮く油　寒草
源兵衛の渡わたつて終電車　末廣艸
大阪に渡し船あり朝の靄　亂耽
安治川に浮く心中は馬鹿にされ　奈里
安治川の親類古い炭問屋　禿山
安治川に友達も無し船頭の子　豆秋

×

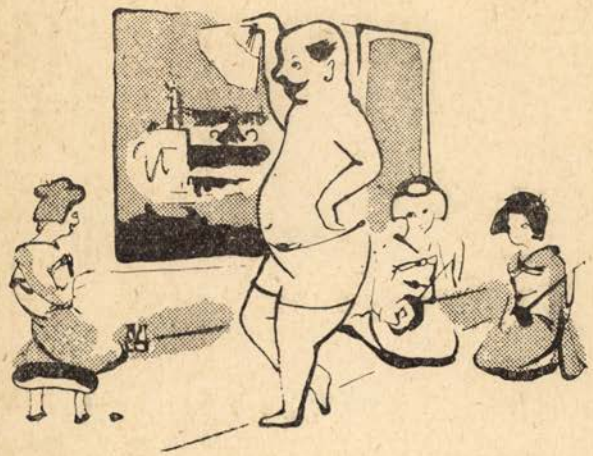
木津川へ材木小屋の影ながし　翠夢
木津川へ石炭船のつゞくこと　夕鐘
木津尻にもう海の香のあからさま　汀柳
木津川へ廓づとめの眼を投げる　變人
木津川の渡し働く人ばかり　同
下駄流れ〳〵木津川尻に暮れ　文蝶
釣竿をかつぐ淀川ちと廣し　綠雨
安治川に育つて船の繪が上手　日華

木津川へ
機首
まげて行き
まげて行き
白峯



（十八）宗右衛門町

大和屋を出てから名士襟を立てたゞ通るだけに宗右衛門町の夜　舟人
宗右衛門町いきなりハイヤー止めさせる　汀柳
宗右衛門町身分が違ふなと思ひ　末廣艸・寒草



宗右衛門町時の人とも思はれず　文蝶

宗右衛門町髪の香に灯がともる　日華
宗右衛門町艸樂さんの好きな雨　豆秋
惑星が宗右衛門町へ隠れて來　同
とは知らず宗右衛門町へついて行き　正明
逃げた友宗右衛門町で又出合ひ　同
宗右衛門町井戸が昔を物語り　日華
宗右衛門町御用商人だけの朝　同
朦朧を宗右衛門町よせつけず　史呂
宗右衛門町靜かにゆくは流行妓　同
富田屋の構えへ乞食素通りし　同
大和屋を默つて出るはおちよぼなり　同
宗右衛門町お金が慾しゆふなつて來た　翠夢
宗右衛門町で五勺の酒をのみ　亂耽

投句募集

東京の巻（新年號より發表）

第一回の題「二重橋」三句

前田雀郎選
宮尾しげを畫

〆切　十二月五日
宛先　本社事務所

兄弟を語る

私の高弟

生田翠夢

江戸みつると稱する弟は、性剛直にして負ず魂の所有者で、身の丈五尺四寸餘、肩幅廣くなんて書き出すと、大

（寫眞は江戸みつる君）

衆小説のまくらにでもありそうですが幼時からの剛情は三つ子の魂何んとやらで、今でも兄貴ちよい〳〵と手を焼いてゐる仕末、但し大分社會大學で修養した甲斐があつてか、小々の御氣嫌取りの奥の手も心得えて、兎角兄貴をたぶらかす事も知つてゐます。と云つて決して江戸がエロでない事は不肖の弟かも知れませんが、せめてもの仕合せです。

しかし先刻御承知の樣に昨年からの滿洲住ひで、大分大陸的色彩が濃厚になつて、大人的の風格も具えた上、ダンスとかをやつて露西亞人とか、滿洲國人の美人を擁したり、日本處女の肌の匂ひを嗅ひだりして、少し許り惡趣味に染んで來た事は、兄貴少々頭痛を催しそうですが、主人を信用して默殺するつもりです。

大の親や兄弟思ひである事は私から譽めるのはをかしいかも知れませんが確かに推賞するに足る事と思ひます、が如何でしやうかごっか最近の句を御覽下さい。

川柳は私の高弟ですが、とても出藍の譽も高く、殊に路郎先生の調子まで盜む位ひですから、油斷も隙もあつたものぢやありません。どうやら私の壓を摩してゐます事は、いなむ譯にはゆきません。

みつるの句で好きなのは

君の愛宇宙は二人のものなるぞ
眞夜中に戰の如く二人居る

先生ちがひ

江戸みつる

醫科醫の兄貴、患者から先生と云ふ尊稱で呼ばれてゐる。兄貴が患者を診察してゐる時はさておき、金冠だの義齒を製作してゐる時の恰好は鍛治屋か鑄掛屋の職人と寸分變りはない。

齒醫者を先生とは苦笑せざるを得んデス大阪で兄貴と連れ達つて遊びに出掛けた時に知合ひの人から先生—先生と特に呼び掛けられる兄貴を時として癪に障つたが、僕が昨年滿洲人から僕を生田先生と先生つきで呼んでくれるんで、僕も滿洲へ來て出世したんだと思つてゐたが、或時友人から滿人の使用する先生の意味を聽いたところ、支

（寫眞は生田翠夢君）

那は勿論滿洲國では○○「樣」と云ふ場合樣を先生と呼ぶので普通の敬稱だそうです——が、兄貴も生田先生だし僕も滿洲國人からは生田先生で字に書

兄弟を語る

けば變りない譯です。

兄貴はナカ〳〵朗かです。折り〳〵兄貴に金の無心を云つてるです。今少しまとまつた金〃呉れたならば、好い兄貴だナアと思ふです。

然し持つべきものは兄貴なりで、有り難い時があるです　兄貴は僕より十歳ほど上だが、僕より情熱家だ。川柳も兄貴の方がやつぱり〳〵マそうだ。

蔓珠沙華　秋の女の情熱か

口づけんとせば唇のかろき痙攣

さてもさでも女給を送る身と嫉りなりわいのうたてやゆゑかい抱く

これらが弟が好きな翠夢の句です

急先鋒は弟

橋本迷兆

（寫眞は橋本白史君）

いつでしたか、ゆきち、迷兆、六祥等の編輯が悪い、あれぢや「ばりこ」の明日が……と、若い連中（と云つても二ツ三ツ年下の人ばかり）が騒いだ事がありました。僕らも早速その人たちを呼んで、相談と云ふ事になつたんですが、圖らずも、その急先鋒が愚弟だと聞いたときには、ドキンとしました。

果して愚弟一流の論で、直ちに編輯はその人達にやつて貰ふ事になりましたが、何しろ「兄貴は古い男でしてれ」と云ふ奴ですから、いさゝか扱ひにくい譯です。句に、文に、議論に取越苦勞の僕をハラ〳〵させる愚弟ですがときにはよくやつて呉れたと喜ばして呉れる事も多い奴です。

おやぢも常に、「兄弟中で一番ゴテであつかましい奴」と云つてゐます。それだけに懐疑と憂鬱の中に在つても力強い將來を背負つてゐるのが愚弟ではないかと身びいきをして居ます。

奴が最近の創作では

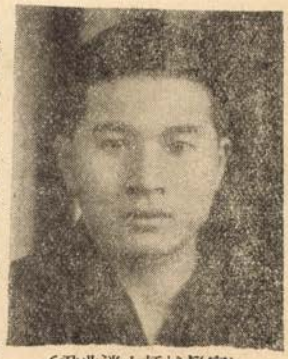
枯れた榊　下げる　水もかれてる

が好きです。

浪漫的であれ

橋本白史

兄より一ヶ月遅れて、それも勿論兄にすゝめられて川柳に手を染た私で有りながら、何時も兄の様に社交的ではなく、我儘で有るためか、今だに川柳的にも兄である迷兆　僕等二人が川柳を初めない以前から二人の兄弟、仲の良い事は他の誰の兄弟と比べても恥かしいものではないと想います。



（寫眞は橋本迷兆君）

私のエゴイズムをエゴイズムとしてでも一通り聞いてくれ　兄、家庭中で尤も正確を好む性格と何時も力の湧きでる様うな兄には　私みた様な痩せ坊主では、決して及ぶ處では有りません

私の好きな兄の句

いろ〳〵の鍵で金庫を順にあけ

唯、私が兄に求めるならば、もう少しロマンチックであつても好い事と、デ

兄弟を語る

リケートな感情を養なつて欲しい事である。惡く云へば、鐵の樣に冷たい兄、理性の勝ち過ぎた兄のやうに私は見るのです。しかし、それだけ人生に無駄がないのかも知れませんが。

向日葵のそれに似て

宮田甫三

颱風一過、四百坪の工場の倒潰を見た、其の屋根に上つてゐる男、それは髪を分けた豐次だつた。そして豐次は笑つてゐるではないか、自然の力の餘りに美しい事をだらう。

（寫眞は宮田豐次君）

豐次は向日葵のそれにも似て、朝は笑つてゐる、晝は胸を張つてゐる、夕方には、默つてあちらを向いてゐる、夜は下を向いて角砂糖の沈んで行くのを見てゐる。

ノーハットの豐次、電話をかけない豐次、酒を呑まない豐次、挨拶が嫌な豐次、友達に好かれる豐次、そして女の恐い豐次、

豐次の句

失戀をした友傘をさして來る
不幸な家の焚火してゐる
櫻より ここから 青い空が見え

（九、十一、十九）

足袋のここから

宮田豐次

兄の甫三は、足袋は九文半を、身長は五尺三寸程、體重は十一貫四百です。ゐそうとうなもんでしよう。

好きなものですか。いゝえ女じやありません戀ですよ、えゝ戀です。長男です、それは典型的な長男です、弟や妹等には私よりずうつと信用があるんです。多少コンミッションを使つてゐるらしいです、それから赤城の子守歌を歌ふんです、大きな聲でね　近頃髪を伸してるんです、煙草も今年から始めたんですが、まだ一人前じやありません

私がね横光利一の「日記」を讀むように進めたんですが、讀まずに新門辰五郎を讀んでるんです　川柳は人間の悲鳴だなんて、おそろしいことを云つてるんです。（寫眞は宮田甫三君）

囲道の灯は嘘つけぬ女にす
ネーブルのころげてるとこ女脫ぎ
痩にふと面白き話しする

情緒的な句が多いです。

片道の切符を持つてゐたりけり
叱られて來れば角力取歩いてる

この二句の方は好きな句です

あまり調子に乘ると叱られそうです。あつ忘れてました。私と二つ違ひの二十四歳。

兄弟を語る

消えてしまう

清水白柳子

友帆の朝寝、これは友人間に有名なもので、毎夜の様にどこかへ出かけて大低就寝するのは二時前後、夜更かしの相手が柳人よし、青年團の連中よしで、交際の廣い事は僕の想像以上である。句會なんかの歸りでも終點迄は一緒だが、いつの間にか消えてしまう。とも角、夕方ぶらりと來た雀踊子君が「友はん起きてるか」と言ふ程だから押して知るべきである。時として意見がましい事でも言ふと、すぐに話の方向轉換を試みて、川柳の方へ持つてくる所は、友帆なか〳〵心得たものである。割に我の強い所があつて、時々一日位物を言はない事があるが、柳信が飛び込んでくると、一べんで仲直りする所は可愛いゝものである　ともあれ同じ趣味のもとに、自分の思ふ方向へお互ゝ進みつゝある現在に感謝してゐます。

（寫眞は清水友帆君）

弟の句で好きなのは

期待して行けば親類愚痴ばかり

さんらんとした中に居る佛壇屋

肩のこる人と　ならんだ　指定席

共同戰線を張る

清水友帆

餘りに親しすぎる爲に特に變つた兄だと思つてゐません。しかし川柳を敎へてくれたのも兄であり、始めの間は兄が居ればこそ割と早く先輩の顏をおぼへたり心强く句が作れたりしたのです。これも兄の七光の一つです。兄は割と憂鬱な方でありますが、一度川柳の話になると非常に朗かになります。

雲行の險惡なる時には川柳の話でごまかしてしまひます。今までは仲よくやつてゐましたが、三味線草の編輯をやつてゐる兄と立場が變つてしまつた時折大いに議論を闘はします。

しかし句會へは二人仲よく出席して歸宅のおそくなつた時には共同戰線を張つて家庭爭議を防止する事にしてゐます。（寫眞は清水白柳子君）

雜談や洒落はうまいがまつた話なんかはまだ聞いたことがありません。今の兄から川柳を除いて了つたら普通のうるさい兄に過ぎません、こんなとこにも川柳の有難味をしみ〴〵感じてゐます。

健吟家として知られてゐる兄ですが、それだけすばぬけた句がないようです私の好きな句を書いて、ペンをおきます。

連のあの事を一人兒見せにくる
有の陽を待たず場末は動き初め
光榮へ　木綿ながらも　紋を着る
電報へ乳房をむごくはなさせる

十一月例會

十一月六日夜　於道頓堀倶樂部

秋いよ〳〵酣に、滿山錦を粧ふ頃、句作慾をいやが上にもそゝる秋さめのこの日、本社十一月例會を開いた、午後よりしと〳〵の雨に人足は殺がれたが、川柳愛に燃ゆる士のみの眞摯な集ひとなつて、非常に傑作がみられたのは嬉しい。

本社新事務所設置後、初めての句會であり、本社客員鳥山隆夫氏の「空と花」と題する講演もあつて、午後十時散會を告げた。

（汀柳記）

出席者

路郎先生、與三郎、綠雨、機見女、文蝶、山雨樓、萬よし、史呂、白峰、禿山、日華、奈里、艸樂、一歩、遊星　九波、華水、末廣、艸　豆秋、白葉　雨少、舟人、寒草、春光、新水、亂耽、正明、鍵人、夕鐘、汀柳

席題「紐」　舟人選

果物の籠にシデ紐網のやう　禿山
紙紐といつでも母は出してれ　日華
紐ばかり締める女の苦勞性　文蝶
紐とれば小包の文字ちぎれてゐ　艸樂
啞の子の羽織の紐の取れたまゝ　九波
忘れ物羽織の紐を躍らせて　雨天
細紐で瓦斯の青さの中にゐる　同
花道の七三足袋の紐が解け　豆秋
干瓢の紐がお碗の中で切れ　同
十二月羽織の紐の色を選り　史呂
申又の紐を結んで考へる　同
運送屋紐のあたりへ欠伸して　白葉
しで紐がお手で切れない若旦那　同
何時頃ですと袴の紐をしめ　白峯
小包の紐も戀しい國の色　同
紐一つあれば死ぬ氣の留置場　寒草
紐一つ小猫半時ほど遊び　同
紐を待つ姿寢巻で立つて冬　同
紋付の紐も明治の親ゆづり　山雨樓
出戻りへ淋しきものに金の紐　同
しで紐を派手に手繰つて賣れること　同
（佳）着物着る女の紐にあきれたり　日華
（同）自らを忘れた紐のとけて居り　汀柳
（軸）思ひ出は紐の地雷火强かつた　舟人

懸賞新年川柳

題「初日」「喜び」　麻生路郎選

▽各題別紙、五句以内、用紙ハガキ
▽賞品　一等三圓　二等二圓　三等一圓　各一名宛呈賞
▽締切　十二月五日（消印有効）
▽宛名　松江市殿町
松陽新報社編輯局　新年文藝係

席題「計畫」　萬よし選

計畫の多い男のすはりだこ　機見女
いつ實行するか計畫まだ捨ず　艸樂

工作が進み 老眼鏡をかけ　亂耽　山雨樓
三年だ五年だ十年計畫だ　正明
計畫へ妻は妻としての智慧　華水
計畫へ 弟案外働らかず　末廣艸
不暖着も 計畫中に 入れて置く　白葉
計畫にコンパスが要り尺が要り　豆秋
計畫のこゝらは文化住宅地　文蝶
計畫の通りに遊ぶ新世帶　日華
計畫もパトロンもよし日本晴　山雨樓
都市計畫 また軒を切り町を切り　寒草
二日醉など 計畫に 入れて 無し　同
計畫に 太い萬年筆を貸し　雨少
街頭の計畫 不良じみてゐる　同
すら〳〵と計畫だけが出來は出來　汀柳
計畫は流れ〳〵て今日も酒　同
計畫に一人は煙草ばかり吸ひ　九波
空想が計畫となる若さかな　同
喫茶店での計畫は知られたもの　史呂
滿洲へ行く計畫とふれ廻り　同
退社ベルさつさと歸る計畫部　同
運轉手 都市計畫をほめて去に　白峯
計畫は女の無智を叱つてゐ　同
メーデーと別に計畫立てた街　同

（二點句）

計畫の見事外れた後に生き　禿山
計畫を別組にする新聞社　舟人
計畫へ男の太い指が鳴り　變人
計畫のそこから先がぼけており　一歩
計畫へ女はいらぬ智慧を出し　豆秋
計畫へ無口は最後迄殘り　文蝶
そろばんをもてば計畫また崩れ　山雨樓
運命はわが計畫をあざ笑ひ　日華
飲むことがあつて計畫同意され　九波

席題「入浴」　汀柳選

湯歸りの足に秋風地を掃ひ　一歩
入浴の溶そけうに居る樂隱居　遊星
女湯へ石鹼の要る手を延はし　春光
仕舞風呂足にざらつくものがあり　文蝶
畫風呂で稽古初めのうたひ聲　萬よし
入浴が好きで虛弱な子を案じ　日華
湯の中で唄へば樂に節が出來　艸樂
入浴の主義者の話し長いです　白峯
デッサンになりそな體湯に沈め　白葉
入浴の一ッ時無我の眼をつむり　禿山
入浴にまで義理がある流し合ひ　同
入浴に十一貫を意識する　舟人
入浴が濟み寄せ書へ一人ふえ　同

（佳）江戸ッ子の三助がゐる湯かな　山雨樓
（同）涙花節うなる湯槽の肩の巾　同
（同）白蟻の列を見つけた畫の風呂　雨少
（同）朝風呂は夢の續きにほろにがし　雨迷
（佳）朝風呂の一人淋しく向きをかへ　白峯

兼題「紅葉」　綠雨選

云ひ譯けに落葉をもつて歸つて來　翠夢
紅葉狩り飲だあとからさめて來る　翠峰
紅葉狩嘘をしてる人があり　史呂
近道を行けば紅葉の散る姿　白峯
バーの畫紅葉の色も哀れなり　舟人
溪谷へ下がる紅葉へ黃昏れる　末廣艸
本降りになつて奥の紅葉をあきらめ　機見女
ハイキング紅葉〳〵に疲れが出　文蝶
寄せ書に紅葉の色のあるもよし　亂耽
醉ひもせず醉はせもせずに紅葉狩　白葉
隱し持つもみぢを先生見逃さず　同
緣遠い姉妹と母の紅葉狩　山雨樓
紅葉狩空を忘れて呑んでゐる　同
（佳）紅葉狩流れの音がつきまとひ　雨少
（同）峠茶屋紅葉の客へ炭をつぎ　機見女
（同）一時雨通して紅葉の坂を下り　同

不斷の精進

福田山雨樓

「戀」といふ題は充分消化し得なかつたと見えて、佳句に乏しかつた。以下短評或は添削を試みてみよう。配列は到着順に依る。

○泣けばたる乙女となつて戀をする　天國

調子のいゝ句である。が下五は「戀を知る」としたい。戀をする乙女が泣く、と云ふ筋だけならば既に古い。春を知つた乙女を「泣けばたる」と表現したゝころが面白いのである。

○戀敵おンなじ雜貨部で勤め　世間音

同じ百貨店で、と云ふ句想であらうが、「雜貨部」と云ふ言葉で巧みにこれを表現してゐる。戀敵などと云ふ古い匂ひのする上五が表現のうまさで救はれてゐる。

○戀人が二番で走る運動會　當藥

この着想は面白い。殊に「二番で走る」は働きのある言葉である。只上五にちと不自然な嫌ひがあるので「初戀の」としたい。

○病む戀の果敢なポプラゆる音　順子

「病む戀の果敢なし」迄は涙もろい感傷に過ぎないが、それ以下の表現で客觀性が與えられ、讀むものゝ心を搏つ。

○末つ子の戀まゝごとの樣に見え　双亭

親から見た娘の戀と云ふ點で類想を脱してゐる。そしてそれをはつきりさせる爲めに「末つ娘の」とした方がよいと思ふ。

○戀文の煙となりし世帶なり　不二號

「なりし世帶なり」はあくどい。「戀文を二人で燒いて世帶染み」

○戀しさは便りもらつた夢をみる　白英

叙法が正直過ぎて趣きがない。「慕つてるこゝろ鏡に見透され」の方をとる。

○チップとる爲に誰にも戀をする　涙子

餘りに露骨すぎて諷刺が効いてゐない。「十人に吸はしても吸はしても紅い唇」と云ふ佳句がある。參考とされたい。

○猫の戀屋根へ屋根へ鳴き歩き　美津女

下五に説明に了つてゐる。「飛んで行き」としたい。それから貴女の句には、工夫の足りないところがある。よく想を練つて頂きたい。

○純な戀水車の廻るところが好き　清春

映畫の一シーンを見るやうな句。中七に句の妙味がある。

○戀してる朝の鏡へ歌が湧く　不美子

格別のうまさはないが素直な表現を頂く。

○戀を知る頃とはなりぬ美顏水　禧純

當り前のことしか出ておらぬ。中七を「頃をひそかに」とすればいくらか氣分が出はしないかと思ふ。

○辭めたのさつぱり會は行き歸り　錦城子

戀をするものゝ氣持は汲み取れるが、句としての技巧が足りない。「辭めたのか病むのか驛から消えた顏」

○尻からげそれも戀持つ姿にて　都留逸

使役せらるゝ若い者の自嘲的な句だと思ふ下五を「身の姿」としたい。

○戀か知ら淡い嫉妬が湧いてくる　芳泉

中七以下が抽象的で柳味に乏しい。「戀か知

ら彼女の明かさを妬み」

○戀に似た心メトロの闇を抜け　久米雄

メトロ即ち地下鐵の闇といふのが よくわからない。何か作者の思ひ違ひではないか。

○戀知りてから世の中を狹く見る　承　春

上五は「戀知つて」がよい。しかし句想が概念めいてゐて僅かに肯かすに過ぎない。

○若い妓へ意見して居る戀懺悔　春　帆

上五は「若い妓に」が本當である　無難な句であるが先づ前拔と云ふところ。

○こひごゝろ夢あたたかく冬に入る　呂　烈

大變調子のよい句であるが、其の内容に獨創味の少いことを遺憾に思ふ。

○初戀を秘めて雪ふる中を嫁く　不路子

初戀を秘めて嫁く、だけでは全く月並であるが、雪の點景を添えたので救はれた。

○戀と云ふ言葉もスツト云へる齡　清一郎

何でもないやうな事だが、戀を聯想して斯う云ふ見方をしたことは異色である。

○あの戀が俺を陰氣にさせたんだ　琴　月

琴月君の十句中には未完成のものが 多かつた。この句は稍整つてゐるがまだ〳〵燃燒不足である。

○ハイキングで戀を知らぬポーズで居　美代坊

女學生などの 武裝に近い姿から、斯う云ふ想を捉えたのであらう。句に新味を認める。下五の「で居」は寧ろ「なり」とか「にて」としたい。

○戀してる窓へ豆腐屋さんがきて　水　客

「戀してる窓」がちと無理である。「戀心豆腐屋に顔見付けられ」としてはどうか。

○戀人はベンチの上に來て居らず　柳　夢

「の上に」は冗語である。そして句想は變るが「戀人は小くベンチで待ちわびる」といふ風に纏めて見たい。

×

以上の内世間音　順子、双亭、清春、不路子及美代坊君の句を推す。

それから天國、清春、久米雄、承春、水客君などはもう本欄の人ではない。「近作柳樽」や「一路集」の欄で活躍されたい。

過去一年數ヶ月の間に本欄の 投句者にもかなりの變動があつたが、毎月熱心に投句を續けられた方には頭が下る。川柳は何と云つても常に作句に精進してゐなければ 優れた作家になることは出來ないのだから、今後も一層の努力を切望してやまない。

×

尙以上の短評や添削について 腑に落ちないところがあれば、遠慮なく 往復ハガキなどで問合せて 頂きたい。何分限りある誌面で多くの句に應えるのであるから、意を盡さない點のあることは重々 承知してゐるのであるが、それを若し誤解されたり、わからない儘で過されて ゐたのでは、お互ひに不愉快である。

それから本欄は他の募集句欄と 違つて研究本位であるから、作つただけの句を 多く投ぜらるよりも、自信のある一句を示される方を希望する次第である。尤もその自選はかなり困難な事であるから、數句を投句された場合はこちらで 選をしてその内の一句を取つて ゐるのであるが、努めて自分で自信句の上に印をつけて出すやうに勵行されたい。

次の課題

「箸」　十句以内　〆切十二月十日　宛先　大阪市浪速區湊町保線事務所　福田山雨樓宛

但シ一般投句と共に事務所へ送付するも可

馴染

西田艸樂選

頭字で電話がもめる　中貫ひ　笑巴亭
葉轉へ子供の馴染引割かれ　史郎
何ンぼ程するとは馴染聞きそれ　葉光
階級もなく朝風呂馴染みゐる　喜田
のれんからもうお馴染の職になり　紫陽
お馴染は後廻しにもされるなり　正夫
馴染となつて藥局はかどらす　綠水
お馴染へ不足の影もさしてゐる　青兒
日禮の程度喫茶店での馴染　史呂
根氣よき外交員に馴染んだり　寒草
馴染には相違無之吝な容　沒食子
父親の代理馴染めぬ席につき　花鳥
まあ！といふ挨拶ですむ馴染なり　楚堂
お名前は思ひ出せない顏馴染　禿山
泣くまいと思ふ馴染へポツポ船　滿女
馴染甲斐もなく無心ことはられ　芳水
顏馴染男二人へ氣が引けて　武糸
コツク部屋馴染と云ふが這入て來　末廣艸
まゝごとのマゝになつたひとときあひ　春帆
通されて見ればいつかの顏馴染　彌生
馴染もう浮氣な戀で物足らす　承春
アパートへ馴染素人風で來る　蛙庵
株屋町ひよつこ馴染の風呂歸り　木履
金持つて昔馴染の街を拔け　久米雄
馴染だけの頃は心も淸かつた　祥月
馴染客主人奥から聲をかけ　朝雨
馴染甲斐ひとつなんとかおさまる　白英
後添へ馴染まぬ子の瓜の垢　葉魚
女から馴染甲斐をのまされる　曉童
お馴染を嬉しく話すコツプ酒　小櫻
駐在所馴染になると又代り　菊路
いゝ日和馴染笑顏ですれちがひ　天國

川柳家戸籍調

從來福田山雨樓君の擔當が今度橋本綠雨君に變られました。左記の規定に依り精々御送稿を願ひます。

(1)姓名　(2)雅號及別號　(3)出生地　(4)現住所　(5)生年月日　(6)職業又は勤務先　(7)好きな句　(8)自信の句　(9)川柳以外の趣味　(10)配偶者及子供の有無　(11)嫌ひなもの　(12)川柳に手を染めた年月

社告

○廣田六浦、岡龍三の兩君が本社同人として入社されました。

○螢ヶ池支部幹事は石森靜太君と更替されました。

○島根縣簸川郡高村に簸川第二支部高松吟社を設置、幹事に尾添好郎君が就任されました。

○社章を107岡龍三、75青木史呂、76西いわを77廣田六浦、四君に交附しました。

きな妻の事を馴染の妓に訊ね　嵜喜固蘊

五　客

妻楊子顔利く人の　凭れやう　春秋
縁起棚逢へる豫感の灯がともり　雛千代

壜

井戸替に一つ出て來たビール壜　青柳
壜の栓結局中へ落し込み　彩泡
壜の數女給不安な眼でみつめ　綠水
牛乳の壜あたゝかい今朝の秋　葉光
葱を買ふ男燗壜持つてゐる　末廣艸
化粧品壜の形を考へるしとし
空壜の利用マダムの思ひつき　花鳥
藥局の壜も待機の姿勢なり　史郎
藥壜も遺品の中に加へられ　同
酒詰めて來る當直の魔法壜　承春
空壜の値もこめてゐるもうけ高　喜由
戀しさは灘の上酒の壜の色　靜波
紙屑屋空壜だけに値をつけて　たけを
繁昌を空壜入れに見せてゐる　沒食子
白粉壜のへらぬさみしさ　曉童
燗壜が俺の希望を知つてくれ　正祐
一升壜男暮らしの臺所　春秋
馴染まれた夜を冷たいも降り　新市街
借りられる馴染も矢張捨てられず　史郎
馴染の妓常着のまゝを叱られる　たけを

吉田水車選

進物のやうに空壜縛られる　菊路
空壜屋匂ひばかりを嗅ひでゐる　同

佳　吟

二合壜男の無理がまだつきず　新市街
硝子工遊びのやうに壜を吹き　柳夢
藥壜の目盛へふつと吐息する　紫陽
藥壜熱のある手に動かされ　末廣艸
壜賣つた金今晩のおかずにし　禿山

(軸)空壜の山に呆きれる見學團　水車

總句數四〇五句、空壜一一〇句酒と壜一〇七句藥壜六二句壜と層屋二〇句化粧品と壜一六句牛乳壜八句壜と獨り者と戀と壜とが何れも四句其他が六二句有り相で尠くないのに壜工場が二句燗壜六句、土瓶茶瓶鐵瓶通じて四句、何れも壜には當てはまらず、壜を臺として扱はれた作家が一人あつた。

◇年賀廣告を募る◇

▽奮つて申込まれたし△

雜誌の上で句や文章を見て、一度手紙を出して交際をしたいと思つても、雅號は分つても肝腎の住所氏名が分らない爲めに、文通さへも出來ないといふ憾みがあるので、川柳家各位の住所氏名を一度に知る便法を兼ね年賀廣告を掲載することにしました　どうか奮つて御申込を願ひます。一人でも多く掲載することがその趣旨にもそふ譯ですから特に貴下の御賛同を切望いたします。

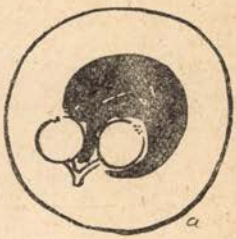
一口　金五拾錢

幾口でも申込んで下さい。一頁希望の方に限り金七圓。一口分の原稿はなるべく簡單に願ひます。

▽申込期限　十二月十日迄（一月號に掲載）

大阪市天王寺區上汐町一丁目五一
事務所　川柳雜誌社
振替大阪七五〇五〇番

廣告御申込は成るべく振替を御利用の上（前金）に願ひます。（三錢以下の切手代用でも差支へありません）



古狸窟雜筆（八）

梅木塵山

（九一）矢筒の枕

昔、矢筒の枕といふものあり。此れは陣中に於て、矢筒を枕にする事にて、特に製作されし枕にあらず。

「楓軒偶記」

陣中ニ矢筒ヲ枕ニスル事ハ、筒ニ響キアリテ、遠方ノ音モヨク聞ユル故ナリ、常ノ枕ヲモ箱ニスル事可ナリ。其中空虛ナル事筒ノ如クナルベシ。四方塞リテハ響ナシト、立原先生云ヘリ。

（九二）福山の蕎麥

歌舞伎の花川戸助六の狂言に、福山といふ蕎麥屋のかつぎといふ一役あり。此蕎麥屋の福山は、寶暦の頃に有名のものなりしが、後には其名聞えずなりぬ。劇場の舞臺に、彼のかつぎが肩に擔きて出る物は、蕎麥の蒸籠にあらずして、けんどん箱といふものなる可し。

「紙屑籠」

古來より助六狂言の時は、堺町ふきや町にても、福山のかつぎ吉原へそばを持來る。其昔木挽町にて、高麗藏初役の助六の時、吉原相生屋のかつぎ出たる事あり土地にありて用ゆるとみえ、福山は近來の名高き者、二代目團十郎助六の時にはいづれのそばか、其の頃は福山の見世ありし事心えぬもの、三四年此方は福山と知るべし。故にけんどん箱かつぎの半天福山より出る事とはなりぬ。

（九三）沓手鳥

杜鵑の異名を、沓手鳥といふ。此れは「沓代鳥」と書くを正しとす。酒手も酒代なり。

「雲錦隨筆」

また時鳥の異名を沓手鳥といへり。一說に沓手鳥、此鳥前生に沓を作つて賣けるを、鵙沓を買て價を乞るゝ故に、鵙は此鳥の來る時は、木の下竹の中に隱れて見えぬ也。

大后百番哥合

ほとゝぎす鳴つる夏の山邊には沓手出さぬ人はあらじな。

（九四）秋茄子

俗諺に「秋茄子は嫁に食にすな」といふことあり。一說によめとは鼠の異名なりといふ。俳諧には新年の祝語に、鼠を嫁が君といふ也。

「略語」卷之二

諺云。秋茄子、嫁に不レ喰 と。夫木集、に秋茄子わささのかすにつけまぜてよめにはくれじ棚におくとも。是をもて思へば、古き諺なり。時珍云。生々縮云。茄性寒利、多食必腹痛下痢、女人能傷二子宮一也。

（九五）月華水

女子の月經を、月華水といふ。此外月經

にはくさ〴〵の異名あり。
「鹽尻」卷之十

月華水、女人月水なり、法苑珠林に出づ

江都にては少女初めて月水の時、是を初花の祝儀と稱して、我近き一門を宴會す

（九六）門松の狂歌

世に「門松は冥土の旅の一里塚めでたくも有りめでたくも無し」といふ狂歌を、一休禪師の作と稱すれども、此れは浪花の小西來山の「門松は冥土の旅の一里塚」といふ俳諧の發句に、下の十四文字を附けて、一休の作と、稱したるに相違無し。世に一休の狂歌狂詩と稱するものは多く後人の僞作なり。

「兎園小說別集」下卷

俗諺に、一休和尙の連歌の發句なりとて

門松は冥土の旅の一里塚

といふを人口に膾炙したり。これによれば一里塚は　天文天正以前、はやく諸國ありしやうに思ふ者あるべけれど、この句一休なりとは定めがたく、いと疑しきものながら、人生逆旅に似たりといふ唐人の句を翻案して、無常迅速の意を示せしはおもしろし。

註。一休は文明十三年十一月に遷化せり。かゝれは一里塚を置れしといふ、天文九年より遡て數れば、六十年許上に在り。

（九七）竈將軍

世間を知らずして、己の家內に於てのみ威を振ふを、俗に竈將軍といふ。此れを女房の蔑稱とする說あれど如何にや。

「本朝二十不孝」卷三

此武太夫俄にたのしければ、昔を忘れ時えて我まゝを振舞へば所に憎み立られ、人の附會絕えて我內の竈將軍、寒いもあついも知らず暮しぬ、云々。

（九八）長　袖

公家または僧侶などを、長袖といふことは、近世の語にあらず。

「太平記」卷第二十一

廷尉北面路次に行合たるを見ても、あはや例の長袖垂れたる魚杯烏帽子よといひ聲を學び指を差て輕慢しける間、云々。

（九九）勘略枕

江戶時代に、勘略枕といふものあり、如何なる枕にや未考。勘略は簡略の誤なる可し。

「正本製」初編

羊眉毛に乙雪白齒、二度の勤めは三疊じき、蒲團ばかりに勘略枕、りつぱなものは鏡臺ばかり、云々。

（一〇〇）しはす

一年の終の十二月を「しはす」といふ。師走と書くは假字なる可し。之れに就きて種々の說あり。

「鹽尻」卷之十四

奧義抄に曰。師走とは僧をむかへ、佛名を行ひ、或は經を讀せ、東西にはせはしる故に、師走といふ心なりと　篤信曰。しはすとは四時のはつる月なれば、しはつといふ心ならんか、四極月なるべし。豐後國に四極山といふ有り。

「俳諧歲時記」

この月をいひてしはすとす、しはすとは年極の略也。つとすと連聲にして、いにしへはつす打まかせていへり。後師走につくりて種々の說をなす者はみな暗推なり。

（終）

是空庵を悼む

麻生路郎

多年本誌のために執筆の勞を惜しまれなかつた本社客員長野吉高氏が、昭和九年十一月十六日永眠された。

この知らせは颱風以上に私を驚かしもしたし又悲しませもした。

氏と私との交友は昭和二年か三年頃かに始まつてゐるのに、親しく膝を交へて語つた事は一度も無い。

氏は私の寫眞を度々誌上に見られた事であらうが、私は遂に氏の影像に接する機會がなかつた。そのくせ、その親しさは世のつれの交ゝでなかつた。

氏は誌上を通じて私の五女ゝりを愛し、その寫眞を送れと云つて來られた事もあり、その寫眞を送ると、眼が大きくて可愛いとか、眼が團ゝ郎のやうに大きいとか云はれて、頻りにゝりに愛撫の言葉を送られてゐた位であり、殊に本誌經營の容易ならぬに同情されて、氏が本誌に執筆された長編「柳の絮」をまとめて出版する店があつたら出して呉れゝたとへ僅かでも利益が出たら、「川柳雜誌」の經費にあてゝくれといふ好意的な申出さへされたが、あゝしたものゝ出版は大阪の書店には向かない事、出版しても收支償はぬ時には、反つて好意にそむくからと云つて斷つた時にも、自分の考へ方が足りなかつた、又何かで應援の出來る場合には遠慮なく云つてくれと云はれて、親身も及ばぬ手紙を度々いたゞいた仲である。

亡くなられたといふ、お知らせによつて氏の經歷を伺つたところが母堂から吉高は中學を出て、高等學校を出て大學を出ただけで、經歷らしいものはありません、一寸教師をしたこともありました。何か研究をしてゐたやうでしたが、何を研究してゐたのかそれも知りません、寫眞を送れとのことですが、吉高はヘンチキ人でして、寫眞も撮らないのでありません、これは大學時代の寫眞です、とて手紙に添えて一葉の引伸寫眞を送つて來られた。それがこゝへ掲載した寫眞である。あの博識多才な長野氏、支那戯曲研究家としての長野氏も母堂にとつては、可愛いしかし一寸氣むづかしやの息子に過ぎなかつたのではあるまいかと思うと、何んとも云へぬお氣の毒な氣がしてならない。

本誌に、はじめて執筆されたのは第五卷の四號に「北廂記」と題された、氏の川柳觀であつた。次いで七號には、「漱石さんと坊ちやん」、九號には「漱石さんと猫」、十號には「漱石さんと子規、楊牛」があり、六卷、七卷と丸二年原稿が絶えて、第八卷の四號から長編「柳の絮」を九號六號七號八號九號十號十一號と執筆し續け、その十二號には「くれのたは言」といふ隨筆を寄せられ、第九卷の一號から再び二號三號四號五號六號七號八號九號十號十一號十二號と二十回で完結され、その號には別に「柳の絮のことゞも」を書かれてゐる。これは私の請うがまゝ單行本として刊行し得られるまで書き續けられたもので、その輕妙な筆致と博識な内容には常に敬服せしめられてゐたものである。編中のモデルについて時々交通せられたこともあつて自分としては非常に興味を以て迎えてゐたものだ。それで九卷九號には別に「柿の皮」の隨筆、十卷一號に「別れる」の短文、四號に「だんだら模様」十號及十一號に「是空庵より」の隨筆を寄せられ、特異な寄稿家の一人として、常に活躍してゐられたのであるが、今後再び氏の才筆を見ることが出來ないかと思ふと遺憾に堪えない。

各地柳壇

いのちあるかを創れ

路郎・緑雨・艸樂・整理

本社同人句會

十月二十二日夜、カナメ喫茶店に於て催され、路郎主幹より重要事項報告及び選句披露講あり十時閉會す。

題　發　展　　路　郎　選

發展へまだものたらぬ主人なり　里十九
御　發　展　候へ僕も四十五　一歩
增資して廻轉椅子のあたゝかみ　亂　耽
たはむれに芦屋夫人の舞踏靴　同
煙突も親の代より太くなり　豆　秋
發展へ子供のやうにデマが飛び　同
横　丁は小便臭き發展地　史　呂
發展はします賣ります住宅地　同
發展へ財布のひもが古びて來　山雨樓
發展へ祖母信心をするばかり　同
發展へ時計〻音のあからさま　華　水
發展の餘地ありズボン鐵が出來　同
發展を祝へば苦勞しましたで　同
發展を祈る水平線の雲　水　車
よく笑ふ發展性のない男　同
發展へ電燈一ッ增やすなり　同
(人)ひらけゆく町の巡査の髭剃し　一　歩
(地)浴場がポカンと建つてから拓け　豆　秋
(天)發展へ益々禿げて來るもよし　水　車

同人句會

十一月十日午後七時より本社新事務所に於ける最初の同人句會が催され、披講後、靜岡の「ちやつきり節」紹介のレコードをかけ唄本を配布、和やかな集ひに十時半散會を告げた。汀柳記

路郎先生、山雨樓、雨迷・緑雨、艸樂、豆秋、浸食子、禿山、竜二、夕鐘、變人、機見女、翠夢、九波、與三郎、水車、汀柳

席題　噂　　艸　樂　選

二代目は噂の通り家をしめ　夕　鐘
噂は遂に噂なりき　九　波
噂途切れて湯のたぎる音　水　車
榮轉の噂へ輕い靴を履き　同
噂する口へ重たい釣瓶なり　竜　三
人の噂戀の噂へ秋暮れる　同
噂した通り窓から首を出し　山雨樓
噂とは別に死體が見付からず　同
つゞり行く噂の綾に生活しており　雨　迷
近寄れば人の噂の滴する　同
(佳)噂聞き〳〵丸髷が出來　豆　秋
(同)蹴いた噂へのれんもちつゞけ　與三郎
(同)落ぶれて噂を否定せずなりぬ　九　波
(同)噂ほど儲けてゐない靴をはき　路　郎
(同)噂とは云はせぬお女將言ひつのり　汀　柳
(軸)心苦しくも噂を否定して　艸　樂

席題　窓　　山雨樓　選

六甲の見えてる窓へ子供抱き　與三郎
陽脚もうすつかり冬の窓にする　浸食子
窓越しに見る青空に父戀し　變　人
アパートの窓が重たい別れ際　水　車
病む人へ窓から遠く北斗星　竜　三
涙ばかり見てる三等の船の窓　禿　山
見送りへ窓から長い首が出る　豆　秋
辻占を呼び込む格子窓に更け　艸　樂
窓越しに隣の人の動きぶり　緑　雨
窓から窓へみかんを投げた　汀　柳
窓は夕げの煙のなかにつゝましく　雨　迷
暮の窓五勺の酒に生きてゐる　路　郎
(五)秋の窓年增のふくぼのがれて來　與三郎
(同)金を借る話主人は窓を開け　九　波
(同)花嫁の帶しか見えぬ窓を明け　路　郎

（同）窓越　の旦那はきつい色眼鏡　夕鐘
（同）めばりした越路の宿の雪あかり　汀柳
（人）額縁のやうに將軍汽車の窓　水車
（地）春の窓灰皿に吹く風もよし　路郎
（天）窓を背に女毛糸のもつれ解く　龍三
（軸）舊事務所
窓に寄れば稻も見えてた西之町　山雨樓
新事務所

横丁を曲つて目差す窓となり　同
兼題　本　疊　打　路　郎選
枯草をつゞきつてゆくホームラン　機見女
青空のサイレンが高し劇的本疊打　沒食子
彼方本疊打はあつけなし　雨迷
ホームラン恥しそうに歸つて來　翠夢
ホームラン皆〳〵御飯喰べに去に　與三郎
本疊打電報料をはづむなり　變人
先生も胴上されるホームラン　山雨樓
ホームランどんなもんだの氣で走り　艸樂
戀人がこつそり來てたホームラン　同
本疊打少し慌てたアナウンサー　水車
本疊打拍手忘れて見られたり　同
本疊打外野はさつと波を打ち　九波
本疊打打者はボールを見て走り　同
幸運は滿疊からの本疊打　禿山
本疊打晝寢の耳に打ちました　同
本疊打「鄙の西北」唄つてる　龍三
スパイクの音輕るやかに本疊打　同
ちぎれ雪にぶつかりそうな本疊打　夕鐘
外野席があふ向けになる本疊打　同
コスモスの庭へホームランが落ち　豆秋
ふるさとが煮えくりかへる本疊打　同

（人）本疊打スコアブックの手がゝる　龍三
（地）負けたゞたゞ祈るホームラン　汀柳
（天）ベーブルース日本の空へ氣兼ねす　水車
（軸）本疊打戀人として見てかへり　路郎

川柳雜誌社**神戸部友句會**（神戸）
十月十六日　於華水居　明　珠　報
兼題　新　しい　吉左右選
新しい下駄が滑つた新開地　竹楓
パン食に新生命をかけんとす　明珠
新しい帽子鏡にうつされる　華水
流行の帽子散髮展で似合ひ　刀郎
オヤ耳掻もある新しいナイフ　春秋
席題　亂　雲　春秋選
月を語る二人へ雲が亂れて來　吉左右
亂れ雲戀の窓から見上げられ　華水
道連れを信じ切つてる亂れ雲　刀郎
地下鐵を出ると亂雲目にしみる　竹楓
亂雲へ宿替のあと押してやり　幸捐
亂雲を氣にして急ぐ牡丹刷毛　同
（軸）亂雲へ望遠鏡は砲に似る　春秋
（軸）亂雲に海岸線の白い波　同
（軸）籠城の天守へ雲の亂れ飛び　同
席題　光　明　珠選
ひとりもの朝の光りへのびをする　春秋
光明を感じて朝の砂利を踏む　刀郎
雫おちて雫の光見まもりぬ　吉左右
老眼がにぶく光つた守衛室　竹楓
平和の光握手を求められ　幸捐
夜の雨光りもつれたアスファルト　華水
ソフアーのダイヤ平凡をきらつてる　同
軸　光るもの光せらで置く御命日　明珠
席題　發　明　竹楓選
發明も近くぼんやり飯を食ひ　明珠
いちくつてゐて發明のフト見附け　春秋
發明をたすける愛の手が伸びる　幸捐
發明展小學生が列になり　同
（佳）發明品そうかいなとはつれなかり　吉左右
（佳）發明を十錢で買る鼠取り　華水
席題　群　集　刀郎選
群集へとり殘された下駄一つ　竹楓
群集へ外人二人高うゐる　春秋
群集へ自動車の中一人ゐる　同
群集の中の噂を聞きもらし　華水
群集がちつて子守は唄をかへ　同
群集を大廻りして藥とり　明珠
（佳）母と呼ぶ手を群集に延べる　同
（軸）群集へトラック閑な顏をする　刀珠
席題　艦隊入港　華水選
艦隊入港水平線の秋の月　吉左右
水兵がどやどやと來て女給立ち　明珠
艦隊入港夕陽に映へる軍艦旗　竹楓
ミス神戸艦隊入港ウェルカム　春秋
上陸の水兵さんへ松竹座　同
拜觀のどの水兵も固くゐる　刀郎
（佳）郊外の窓に軍艦數へられ　同
（佳）艦隊入港水兵さんへ道をあけ　吉左右

川柳雜誌社**千引吟社例會**（廣島）
十月十六日　於春帆居　承　春　報
兼題　血　承　春選
滿洲の夕陽に赤き血の匂ひ　香山

輸血をじつと見守る博士　春陽
血みどろの兄へ弟力むなり　春帆
動脈か血か繃帶を駈けめぐり　東陽
いまわしい血のつながりと見る世間　春帆
否定する父へO型ピタリ合ひ　蛙庵
（秀）我慢する顔が血を見てヨッと泣き　芳泉
（同）墜落か血は鐵筋を染めてゐる　東陽
（同）輸血してベットの上の人を見る　同
（人）小指などものかわ血書して志願　春帆
（地）出血の量が淋しい覺悟させ　芳泉
（天）輸血する友情太い腕を出し　蛙庵
（軸）血壓の高さへ禁酒しいられる　承春

兼題　理　解　蛙庵選

理解ある友は頭腦の良い男　東陽
無理解だなどと子供に叛かれる　春帆
最少し理解の欲しい父は老ひ　東陽
母の理解へ朗らかな新夫婦　春帆
いつのまに理解の出來る年となり　辰男
（秀）無理解が子の純心を傷つける　承春
（同）何事も理解し持つた父でした　同
（同）無理解な父へ反感つのらせる　承春
（同）子の無理を母は涙で聞いてやり　東陽
（軸）好きあうた二人へ親は見ぬふりし　蛙庵

兼題　信　用　東陽選

名刺一枚信用されてゐる　春陽
信　用を失ふ前の旨い酒　辰夫
信用をしすぎた金がそれつきり　芳泉
熱心と努力を信用して呉れる　承春
衆望へ日本を語るメッセージ　蛙庵
愚かさは其の出鱈目を信じきり　承春
（秀）信じると幼な友達誓ふなり　辰夫
（同）定期などして信用を何ふる氣　春帆
（人）信じてはゐるが不安のつのる判　同
（地）氣象臺信用をして朝を出る　春陽
（天）失敗を課長忘れて呉れぬなり　春帆
（軸）信用がなくて追はれた生活向　東陽

兼題　晩　秋　芳泉選

晩秋へ鳴子の繩が垂れ沈み　蛙庵
憂鬱は秋のすゝきに似て淋し　東陽
ポプラハラ〳〵晩秋の校庭　承春
晩秋の淋しさしれとつく鐘木　春帆
（人）鐘の音まで晩秋の色に暮れ行く　同
（地）晩秋の日射へやせた干大根　蛙庵
（天）ルンペンの焚火へ暮れ行く晩秋　香山
（軸）フト醒めの夜半へ鳴子の音がする　芳泉

兼題　力　春帆選

打込んだ力へ固い鐵の音　東陽
日本のみへない力にあるにらみ　蛙庵
忙がしさ祖母の力もかりられる　辰夫
（佳）たんでんの力笑ひにふっと消へ　蛙庵
（同）牛程の力を持つて使われる　承春
（同）元氣さを力一杯泣く赤子　芳泉
（人）幼な子の抱きつく力手にあまり　辰夫
（地）力強くも握つて呉れた手の溫み　承春
（天）金力に何時か身分が屈してた　芳泉
（軸）單調に力で生きてる濱仲仕　春帆

兼題　足　（共選）　中山香山選

足音がみんな遠つて人待つ身　芳泉
閣へ出て我が足音がフト淋し　承春
彈力のある足並で行進し　東陽
足音に輕い夢地がさめて立ち　同
（秀）足で直した座薄團をしからる　春帆
（同）優勝の喜び足は地に付かず　同
（同）車夫の足々ずの樣な筋が浮き　芳泉
（人）しびれきらした足をなげ出す　蛙庵
（地）足音へゐずまいたゞす應接間　同
（天）工面のつかぬ重い足どり　蛙庵
（軸）俳優と云へども役は馬の足　香山

兼題　安田春陽選

閣へ出て我が足音がフト淋し　承春
足で直した座薄團をしかられる　春帆
車夫の足みゝずの樣な筋が浮き　芳泉
艶然と踊れば曲る脚線美　辰夫
（佳）足音へゐずまいたゞす應接間　蛙庵
（同）優勝の喜び足も地につかず　春帆
（同）工面のつかぬ重い足どり　蛙庵
（同）びつこぼど人と人とに狹まれ　辰夫
（地）女房の男勝りで十文半　芳泉
（天）彈力のある足並で行進し　東陽
（軸）足跡をならべて濱の散策よ　春陽

川柳雜誌社　伯耆句會（鳥取）

十月廿日　三鴨美笑報

兼題　交　番　雅柳選

いかめしい交番巡査に戀があり　一柳
心安うしたころ交番又替り　赤岩
交番で勝で小路を教へられ　紫屋新
（佳）交番にせきばらい一つ殘し去り　一柳
（人）交番を出ると世間が明かくなる　春樹
（地）交番は留守を自慢の顏で出る　明甫
（天）交番に印袢纏醉ふてゐる　美笑
（軸）飲すぎた始末交番聞いてゐる　雅柳

兼題　借　物　美笑選

叱られて借物　近す　夜は寒し　仰天
借物の多少そこには損もあり　雅柳
借物で儀式一日すますなり　紫屋新
（秀）小屋つて借物置いた念を押す　明甫
（同）借物と知らず上手に賞めてゐる　銀月柳
（同）借物は兎角期限に返されず　春樹
（軸）想ふ様ゆかぬ借物合いかれし　美笑

兼題　氣　性　銀月柳選

遺傳とは別な氣性で金をため　仰天
つき合へばさほどむづかし氣でない　一柳
氣性とはあまり皮肉な言いぐさよ　雅柳
御氣性がやさ　くすぎて金が逃げ　春樹
正直な俺の氣性が淋しいな　美笑
氣性かと見れば少しは惚れた顔　明甫
（軸）親に似た氣性で金はいつもない　銀月柳

席題　養　子　美笑選

家あけて養子二三日飲みあるき　泣坊
末の娘に養子を迎えて暮します　赤岩
（佳）財産を大方養子遊んだり　雅柳
（同）三十を越して淋しき養子する　仰天
（人）貰われた養子悲しい日が續き　銀月柳
（地）聞かされ養子淋しい氣持がし　明甫
（天）飲と言ふ事だけ養父氣にいる　春樹
（軸）とやかを言ふ養子に子が出來て　美笑

席題　水　害　銀月柳選

井戸端の會議出水に流れけり　明甫
水害に逢はしてならぬ妾の家　美笑
大水のあまり大きな仕事なり　同
程過ぎて届く水害見舞狀　春樹
（軸）水害の悲しき使へ飛んで來し　銀月柳

川柳雜誌今治支部　小松結婚披露の夕

十月二十二日　熊の井樓　曉童報上

兼題　社　長　曉童選

社用とは別に社長の電話なり　十靜
禿げぶりの見事社長と間違はれ　史郎
同僚の視線を背に社長室　同
意外にも社長名前を知つてくれ　心府
（佳）社長には今年十九の娘が一人　小松
（同）昇給かくびか社長の金ぐさり　宵明
（軸）何かいふ氣か社長いなない　曉童

兼題　神　様　小松選

神様へ感謝のつゞく新家庭　心府
神様の仆事に無駄の多い事　宵明
秋晴れへ神様がつぎ出されてる　十靜
神様の御札の香ひ梅雨さ中　曉童
神様は寢顏の上の安らかさ　一風
神様へ半玉何かたのむなり　十靜
（佳）神様を信じて今日も靴をはき　一風
（同）神様へちとすれてみる待呆け　曉童
（同）神様に頼む心にすきがあり　史郎
（同）神様へすまない人をつれて　曉童
（軸）無理と知りつゝ神へ日參　小松

兼題　勘　定　心府選

勘定をすましてからが長くなり　小松
勘定へ働らくものゝ朗らかさ　一風
勘定をすましてプラリネオンの灯　小松
捨鉢のやうに勘定書を投げ　史郎
勘定を眼で受取るウエトレス　十靜
勘定は酔ひにまかせて逃げておき　宵明
（佳）勘定は割り切れぬまゝ別れ　曉童
（同）屋臺から勘定をした星をみる　宵明
（同）勘定を女房とするとぐらず　曉童
（同）酔つてない瞳で勘定は見直す　一風
（軸）勘定をすまして出れば青い空　心府

席題　丸　髷　十靜選

丸髷が出て悪友をまごつかせ　一風
丸髷へ朝の光りとなつてゐる　宵明
丸髷のみかんむぐ手をみてゐたり　曉童
人形のやうに丸髷座らされ　小松
父兄席丸髷太くゆれてゐる　史郎

席題　丸　髷　紫陽選

丸髷のどこに悲劇があり得やう　曉童
父兄席丸髷太くゆれてゐる　史郎
見て貰ふための丸髷逃げまはり　一風
丸髷が出て悪友をまごつかせ　同
丸髷を初めて結つた日の長さ　一風
人形のやうに丸髷座らされ　小松
丸髷になつた三つ目を見直され　同
丸髷へ今日もオイとは呼べぬなり　宵明
丸髷へ新派悲劇がピンと來る　曉童
丸髷にうれしい事の續くなり　十靜
（軸）丸髷へエプロンをして落ちつけず　紫陽

席題　丸　髷　一風選

丸髷にうれしい事のつゞくなり　十靜
丸髷が夫より背を高くする　心府
丸髷へエプロンをして落つけず　紫陽
丸髷の今日嬉しくも花を活け　同
丸髷に年中結へて日本趣味　史郎
丸髷に結へばだん〳〵母に似て　同
丸髷へ新派悲劇がピンと來る　曉童
丸髷へ昨日からの七輪や　同

席題　丸　髷　　宵　明選

丸髷のみかんむく手をみてゐたり　曉　童
丸髷のどこに悲劇がありやう　同
父兄席丸髷太くゆれてゐる　史　郎
丸髷　なつた三つ目を見直され　小　松
丸髷の少しあわてた聲となり　十　靜
(佳)丸髷がまず新年を香はせる　弘　童
(同)丸髷を始めて結つた日の永さ　一　風

川柳雜誌社
竹原支部　**例　會**（廣島）

十月二十七日　於竹原郵便局　町田承春報

兼題　菊　　松井春帆選

感嘆の菊は自然のまゝで咲き　東　陽
生活の餘裕を花壇の菊へみせ　春　陽
菊の香の佛間に匂ふ朝禮拜　彌　生
嬉しさは他國で拜む菊の紋　同
なやましさ告げる樣に狂菊　芳　泉
家賃取り菊など賞めて腰を据へ　蛙　庵
(五)白菊が一層可憐に見ゆなり　承　春
(同)野菊咲きほゝけて秋風の中へ　呂　烈
(同)うら枯へ野菊一もと咲き殘り　芳　泉
(同)子をあやし〳〵出て來る菊畑　承　春
(同)朝寒の雨戸をくれば菊かほる　芳　泉
(人)菊いぢる間が僕の時間です　承　春
(地)これしきの餘裕へ菊の美をほこり　春　陽
(天)生活苦忘れて菊に佇めり　蛙　庵
(軸)巧まない菊の白さへ宵の月　春　帆

兼題　前　途　　久保彌生選

過去は過去前途へ強く生きんかな　承　春
婚約へ前途の希望などもきゝ　承　春
父のない子の前途へ若い母　蛙　庵
(五)七轉八起前途への希望　承　春
(同)逆境のしみ〳〵前途考へる　同
(人)氣まぐれが子等の前途を暗くし　同
(地)百姓の前途へ親子無言なり　呂　烈
(天)前途は々帆綱の強さきしみ　同
(軸)赤飯へ前途を祝す子の門出　彌　生

兼題　短所（共選）　町田承春選

お互が短所に氣付く倦怠期　芳　泉
興奮が醒めて短氣であつた事　同
得心の上の短所がよく目立ち　東　陽
解消へ短所が胸に泌み込みて　同
(秀)四十へ短所の角をたゝかれる　春　帆
(同)寢てるまも夢で短所があらはれてた　呂　烈
(同)事勿れ主義へ短所隱される　東　陽
(人)短所だと知りつゝ固性まげられず　春　帆
(地)女房の短所數へて愚痴な母　芳　泉
(天)友情が僕の短所を指摘する　春　帆
(軸)冷靜にかへり短所をいましめ　承　春

短　所　　小田蛙庵選

短所だと知りつゝ固性まげられず　春　帆
(佳)お互が短所に氣付く倦怠期　芳　泉
(同)友情が僕の短所を指摘する　春　帆
(人)一ぱいの酒に短所が出てまゝ　春　陽
(地)得心の上の短所がよく目立ち　東　陽
(天)四十へ短所の角を叩かれる　春　帆
(軸)氣短かさ茶碗のかげら拾はれ　蛙　庵

席題　二日醉　　竹鼻呂烈選

諦めて布團をかぶる二日醉　芳　泉
欠伸を夢の樣に過す二日醉　春　陽
二日醉あてつけらしい音も聞き　芳　泉
氣抜けした樣に出て來る二日醉　承　春
二日醉心のまゝに鈍勤し　春　陽
二日醉柿の事など思つて見　芳　泉
(秀)二日醉それからあとを考へる　蛙　庵
(軸)醒めて呑む水をわびしき二日醉　呂　烈

席題　訛　　黑本芳泉選

おいどんを連發してる閣下殿　春　陽
どこかに似た訛に國が懷かしく　東　陽
三等車國の訛をなつかしみ　春　帆
新任の御國自慢へ出る訛　承　春
(佳)醉ひ頃へろこゝになつた國訛　彌　生
(同)國訛まれて女給は酌いで呉れ　同
(同)國訛船頭地聲のまゝ出し　蛙　庵
(同)國訛すぐに親しい口をきゝ　同
(人)口論の一人は大阪辯であり　承　春
(地)國訛旅の土産に覺へとき　蛙　庵
(天)純な氣をなまりに見せて女中居る　春　帆
(軸)新入りがまれられてゐる國訛　芳　泉

席題　時　計　　岡田東陽選

立話時計意外に廻つてゐ　芳　泉
時間待時計の針のもどかしさ　彌　生
はなれ家の時計が響く夜のしじま　承　春
時計だけ大きく貸にすゝけてた　呂　烈
サイレンへ合す時計を止めて置き　蛙　庵

病　床　　吟

(佳)チカタクの音をはかなくきき　春　帆
(軸)臨終へ時計の動き生きた音　東　陽

席題　給　仕　　清記互選

成功法給仕時代もありました　芳　泉
茶柱がたつて給仕をほめるなり　蛙　庵
轉勤へ忙しい給仕がりられる　東　陽
夜學の疲れ給仕やせてる　呂　烈

お茶汲んだ頃なつかしき立志傳　承春
さん付に呼べば給付は輕く來る　春帆
おばさんの給仕へはしやぐ合宿所　承春

畔柳社木履居句會（神戸）

十月二十七日

席題　冗談　　被講互選

冗談を氣にする妻のあどけなさ　笙人
冗談にして窓の灯に目をそらし　水客
冗談にひやりとさせた空笑ひ　秀太
冗談へ娘十八むきになり　青吾
冗談のうまい男が戀をされ　天秋
冗談に聞いて手相が氣にかゝり　本履
冗談にせよこの頃の仲のよさ　明坊
冗談を信じて子供泣き止めず　久米雄
冗談のあとへお美味しい茶の香り　一蜂
冗談へ床の逢磨の眼がまるい　某人
冗談が過ぎて獨身寒くれる　同
冗談と別に借金促きれ　喜山
停電に冗談の先忘れたり　九天

席題　住宅地　　秀太選

住宅地土いじりする畑があり　天秋
逢ひに來た女給住宅地で迷ひ　九天
驛までの遠さをかこつ住宅地　喜山
水道のそこまで來てる住宅地　同
（人）バス搖れて搖れてバス着く住宅地　某人
（地）漬物や聲が澄みゆく住宅地　一光
（天）住宅地市場の裏を通ちされ　某人
（軸）住宅地ポストが出來た道の幅　秀太

席題　爆笑　　久米雄選

爆笑のそれから獨身が淋し　九天
爆笑へ眼鏡越し見た奥の部屋　秀太
爆笑へ誰れ彼れなしの氣がとける　明坊
爆笑へ餘韻がきえぬ幕の色　水客
爆笑を遠く聞いてる觀ひ酒　同
爆笑の九五人連れを犬がかぎ　同
爆笑にお茶のこぼれた一人立ち　某人
盜電がふつと氣になる大笑ひ　同
（人）爆笑の名殘歪んだ顏となり　天秋
（地）爆笑へジョッキお代り持て來る　喜山
（天）爆笑の中に本尊まだ三つ　某人

席題　元町　　明坊選

元町の端で別れた急ぎ足　秀太
元町に海の香がする午前二時　天秋
元町の夜更け英語の唄を聞き　某人
（人）元町を斜に通インテリイ　一光
（地）元町へ嬉しく入る女學生　同
（天）水兵がゐて元町の空が紺　某人
（軸）寃に生きて鈴闌灯を暗らうする　明坊

兼題　掛　値　　天選

出まかせの掛値の云へるよい天氣　九
市價なんか云ふて掛値で買はされる　明坊
後添の五つばかりを多く云ひ　秀太
大掛値かけたつもりが安がられ　喜山
云いなれぬ掛値へ顏をみつめられ　天秋
正直に掛値が云へる顏のしわ　水客
番頭耳打ちで五分割引かれ　久米雄
掛値などみぢんもないと首をふり　某人
首つりは靜かに掛値負ふてゐる　木履
（佳）見えない掛値を酒の醉が買ひ　一光
（同）結局は負けた値のまだ儲けてる　久米雄
（地）ぶちまけた話掛値を云ふてゐる　明坊
（天）骨董屋云ひ値で責れて不氣味が　水客
（軸）掛値など云へて小僧の爪揚子　某人

兼題　助太刀　　水客選

リリーフの投手母校の聲でたち　九天
助太刀の妓は笑靨そとおさへ　一蜂
一瞬の危機助太刀の辿りつき　秀太
助太刀は名乘りも上げず斬り拔ひ　同
適令期娘の云分へ母も足し　久米雄
言ひ淀む電話主任が貸せといふ　某人
助太刀は強いときめるヒロイズム　同
助太刀は煙草の唾をゲットとのみ　木履
（人）二上りのその先助勢たのまれる　九天
（地）詰みかけた方へ助言の首が寄り　某人
（天）蓋をした送話機横の智嘉を借り　木履
（軸）助太刀の妓はまだ若い座敷の灯　水客

兼題　櫛　　某人選

福白髮見つけて櫛をおいたまゝ　秀太
櫛あてゝしみ〴〵秋の風を知り　一光
悪い夢氣にして櫛の齒がこぼれ　一蜂
よい髮のついでに櫛も賞められる　明坊
櫛折れて粗忽の朝をソッと出る　木履
櫛輕き秋の陽ざしの洗髮　天秋
鏡臺に櫛一つある獨り旅　水客
櫛もてば油のにほふ雨の夜　同
湯上の頭仲居に櫛をかり　喜山
二ア人の氣持が異ふ龜甲櫛　同
（人）櫛の齒へ秋しのびよる毛が殘り　九天
（地）櫛ふめば二つに割れたうそ寒さ　水客
（天）いゝ夢を見てめる櫛の落ちたまゝ　久米雄
（軸）物思ひ櫛に思案があるものか　某人

川柳行人句會（大阪）

十一月二日夜　於カナメ喫茶店

今回本社同人に入社せられた青木史呂君の慶びを茲に句筵を開く、此日地方よりの投吟多く參席者も二十一名、非常な盛會だつた特に記念賞を高點順により亂耽、與三郎、靜太、機見女　彩泡諸氏へそれ〴〵贈呈して十時散會す。

兼題　正　座　　緣　雨　選

先輩の正座の膝へ子が坐り　葉光
正座から借りる話を出し渋り　機見女
末席の異議を正座は知らずゐる　彩泡
正座からいと有難いことを聞き　曉童
遲刻して正座へ通るモーニング　史呂
老獪な挨拶正座立ち上り　亂耽
（人）正座から貰錄のある聲を出し　機見女
（地）美しい國なみで正座笑ふのみ　靜太
（天）拗れ者の正座へ坐る夜の寒さ　亂耽

兼題　茶　釜　　秀　山　選

隱居所の靜さ茶釜の湯がたぎり　艸樂
故郷の夢茶釜に水が切れた夢　九天
財界の話に觸れず茶釜ほめ　葉光
大人びた手つき茶釜の蓋をとり　機見女
懇懃にほめる家寶と云ふ茶釜　彩泡
甘茶煮る日なりお寺は茶釜出し　同
着飾つた中に茶釜の音が冴え　天國
骨董の茶釜と知らず賞められし　志世子
茶釜とも別れきれなく土とゐる　美智子
熱の子に文福茶釜の話する　一路
軸を褒め茶釜を褒めて抹茶席　史呂
（佳）湯氣たてゝ茶釜は故郷の色　亂耽
（同）深刻な惱みの前に沸く茶釜　美代坊
（同）白髭に茶釜の湯氣がスッと消ん　變人
（同）暇乞ひ茶釜の側に老いた父　浮鬼
（人）幸福は茶釜を賣つた時に消え　曉童
（地）茶釜の手嫁く日の近き指に見ゑ　遊星
（天）凱旋の兄へ茶釜は光つてる　秀山
（軸）掘出しと云ひ道具屋は茶釜見せ　九天

兼題　ラグビー

ラグビーの蹴上げた空の日本晴　艸樂
ラグビーへ誘ふは戀を持つてゐる　變人
ラグビーに勝つて生駒の山は澄み　美代坊
ラグビーと野球に別れ一ツ家　志世子
ラグビーに支那人の足賞められる　秀山
ラグビー部張合のある雪となり　青鬼
ラグビーの選手と質屋心得る　與三郎
ラグビー部の怪我をしそうに入場し　同
ラグビー部の副將清い戀かあり　靜太
ラグビーの應援にくる痩せた姉　一路
白足袋の男ラグビー知つてゐる　史呂
タックルをしてから西が崩れ出し　明珠
（人）ラグビー部のメダルが秋に光りた　靜太
（地）ラグビーのチームが慾い社長なり　與三郎
（天）感激の夕陽ラッカーうなだれる　亂耽

兼題．牡　蠣　　水　巴　選

牡蠣船のすき間の風がどぶ臭し　九天
牡蠣飯はおもちやの樣な釜に入れ　彩泡
牡蠣割れる廣島辯の息しろし　流之介
牡蠣飯も炊いてみませう新家庭　志世子
牡蠣船へ下りる旦那ほけつまづき　史呂
一人前酢牡蠣を買ひに橋を越え　かほる
牡蠣料理おごる弱味も嬉しそう　明珠
顏に似た指で廣島牡蠣を割り　機見女
牡蠣殼の朝陽へ雀二羽三羽　葉光
（佳）白い街並のひとゝこ牡蠣を割る　亂耽
（同）牡蠣飯へ妻も子もゐず膝をゐる　曉童
（同）牡蠣船の仲居の耳へ果て太鼓　秀山
（軸）郷の唄牡蠣を割る娘の口ごもり　水車

兼題　巡　査　　春　光　選

ネエ君と巡査微笑する說喻　葉光
親友が巡査になつて親しめず　與三郎
色街の巡査であつて捌けてる　史呂
駐在所巡査和服で飲んでゐる　美智子
巡査が見てゐて三振してしまひ　靜太
獨身の巡査聖書を見てゐたり　公平
顏馴染巡査輕うに叱つてゐ　遊星
行末は小店持ちたい巡査なり　與三郎
女の醉どれに巡査も困り果て　里十九
親切な巡査地圖まで書いてくれ　彩泡

兼題　もろみ　　里十九　選

精進へもろみで濟ますことになり　曉童
もろみからお國自慢となりました　靜太
故郷からもろみ年中行事なり　天國
世話すきの男もろみが好きといふ　變人
寒行の和尚もろみの膳に就き　史呂
つきあいはもろみの味も知つてゐる　與三郎
氣苦勞の多い母親もろみ好き　艸樂
前垂れへ隱してくれたはもろみなり　曉童
貧しさで食ふのではないもろみなり　明珠
雨續きもろみに一寸箸を入れ　美代坊
（佳）もろみの味小指の先でなめてゐる　曉童
（同）例年の通りもろみをくれるなり　かほる
（同）母親の箸からもろみ減つて行き　明珠

（同）大阪の旦那もろみの味をほめ　亂耽
兼題　花屋　靜太選
女學生二人になつて行く花屋　史呂
稽古日とみえゝ花屋はよく賣れる　彩泡
水揚げの事も花屋ゝ云添へる　同
菊の香の中から花屋返事をし　機見女
鉢の菊ほめて花屋が通りすぎ　葉光
失業へ花屋がしたい妻を持ち　與三郎
夜店の灯花屋の前で途切れて居　同
帝大の秀才花屋の店開き　同
花屋から秋の氣持になつて出る　あきら
花屋から花の先生借りが出來　明珠
雪になりそう花屋の戸を閉める　九天
花屋して葬儀屋をして慾ふかし　同
花屋から出るお太鼓が高いなり　曉童
紋付が花屋の前で持ち合せ　天國
費からを花の師匠の花屋さん　青鬼
（佳）西陽から花屋忙しい水を打ち　明珠
（同）花屋から貰ふた釣錢が邪魔な　公平
（同）花屋ゞアレンジャンに似た男出る　亂耽
（同）十二月花屋の顔は痩せてゐる　かほる
兼題　頬被り　かほる選
頬被りして赤城を下りて行き　與三郎
惚れられる顔に出來てゝ頬被り　亂耽
頬被りいやさお富と出さうなり　艸樂
分讓地敎へて呉れる頬被り　彩泡
好きな妓の顔立てゝする頬被り　節子
鍬かつぎ頬被りして行く五六人　美智子
頬被りおどけた顔を一寸見せ　青鬼
二ヶ連だなと思つただけの頬被り　一路
頬被り汽車は東京迄ゆけど　曉童
頬被り用水桶にしやがんでる　里十九
頬被りどちら向いても山ばかり　緣雨
頬被り病氣で歸る友に逢ひ　機見女
頬被り漫畫のやうな鼻があり　靜太
舌打をして鳴子引く頬被り　九天
（人）頬被り野面の朝へ白い息　艸樂
（地）頬被りして親方の戸を叩き　亂耽
（天）好きな妓が後からとる頬被り　節子
兼題　流行妓　艸樂選
レコードとタイアップする流行妓　史呂
重壓の紙幣に耐へし流行妓　公平
金のない學生好きな流行妓　與三郎
宵までは母の姿の流行妓　節子
添ひ遂げて貧しく暮す流行妓　同
流行妓いづの間にやら座を外し　水車
早や口の癖があるなり流行妓　同
流行妓星を數へる宵もある　天國
流行妓酒も煙草もいけぬなり　機見女
流行妓彰で浮世の義理に泣き　遊星
息拔きを遠出にしてる流行妓　禿山
弟子連れてBKへ行く流行妓　史呂
落籍される相手に困る流行妓　彩泡
郊外の一夜流行妓へ明ける　亂耽
代筆のまだ氣に召さぬ流行妓　九天
流行妓事實小説とはなりぬ　葉光
流行妓二十二三の小柄なり　明球
流行妓尼で了ると思はざり　里十九
流行妓やがては消えてゆくものを　美智子
（佳）流行妓指さればならぬ指環　與三郎
（同）故知らぬ寂しさのある流行妓　浮鬼
（同）流行妓醉ふた姿を喜ばれ　同
（同）流行妓ダイヤ一ツが物をいひ　珍虎太夫
（同）湧く雲に思ひ出があり流行妓　靜太
（軸）流行妓ひを封じて今日は呑み　艸樂
兼題　橇　亂耽選
硯汁に溫まつてゐる橇の旅　遊星
吹雲吹雲情熱の橇走らせる　靜太
ピストルもならず眞直ぐ橇がゆく　曉童
戀の破局を橇に托さん　同
橇の鈴故郷を離れてゆく心　機見女
橇遠く半身像の人がゆく　艸樂
雪の原日の丸立てゝ橇がくる　變人
（人）人間が降りると橇は白くなり　かほる
（地）橇が行くお伽噺の鈴の音　流之介
（天）トーキーの橇囁きを乘せて消え　曉童

川柳雜誌社　松山句會（松山）

席題　生れつき　石丸晴朗報
晴朗選
生れつきらしい夫人の不行狀　大觀
親も子も無口お家の生れつき　青帆
生れつき損な短氣なまゝに老ひ　浸歩
先生がもう見込んでる天才兒　耕一路
生れつきですよと妻のつんと居る　秀夫
生れつき馬鹿ではないが金がなし　五健
生れつき女と金に薄い緣　浸歩
酒癖は生れつきとも申されず　五健
生れつきですと鋭い聲になり　拓水
天分の繪筆が冴へる十五・六　大觀
生れつき馬鹿とは淋びし男の子　晴朗
兼題　晴　五健選
上海出征論功行賞に浴して

晴れわたる空より廣し君の恩　漫歩　晴朗
月曜は皮肉朝から晴れて居る　秀夫
秋晴へ運動會が續くなり　拓水
朝星へ稼ぐ地下足袋露路を出る　耕一路
颱風のあとに秋晴待つてゐた　かき松
番傘が本當に邪魔な晴になり　秀夫
金がなく日本晴を持てあまし　楳子雨
節穴の僅なすきへ陽が入り　大觀
見送りの皆んなが賞める空の色　楳子雨
レコードの棒高飛へ晴れ渡り　同
好く晴れて物干竿が重くなり　大觀
三百里先のニュースに晴とあり　楳子雨
椽側に猫伸びきつてイ、天氣　五健

席題　松茸、茸狩　靈子選

松茸の香りへ爛の追加が來　拓水
吸物の蓋を松茸洩れて來る　大觀
茸狩の本陣石で寵を築き　五健
松茸がありそうな山すべる山　晴朗
頂へ出て茸狩の徑をきめ　秀夫
茸狩の早さ椹へてる樣に取り　耕一路
(軸)松茸は親子の樣に並べられ　靈子

兼題　畫の藝妓　大觀選

本當の顏で藝妓の畫を居る　秀夫
何んの炙だらうか畫の妓がすへる　五健
料理屋へ畫は裏から來る藝妓　晴朗
モウソンナ時間と畫へ藝者起き　五健
畫風呂へ藝者自分の顏で來る　拓水
畫遊び老妓に意見聞かされる　大樓
畫寢から醒めて藝妓のふと淋し　拓水
藝妓ふと畫間の鏡見てさびし　楳子雨
流行妓畫の電話へつんと立ち　晴朗

藝者屋の畫はストライキに似たり　靈子
十二時の時計を合はす遠出鯔　晴朗
ひかされる噂さィ、妓の畫を縫ひ　五健
洗濯の舞妓へ屬く不足稅　靈子
本名で畫の藝妓に用事あり　五健
畫寢からハテナと藝者花になり　かき松
(軸)鏡臺の忙しい背へ四時が鳴り　大觀

席題　人格　大樓選

人格にそろ〳〵ひゃの入る世帶　青帆
人格を惜まれながら露路に住み　漫歩
人格と別にどん〳〵金が出來　秀夫
人格を疑ひ隣に泣く女　大觀
人格で食へぬ世相へ妻の愚痴　青帆
人格をとやかく云ふて醉ふて居る　楳子雨
人格を扇さぬ程に社長醉ひ　漫歩
だまされて居て人格者疑はず　五健
人格者昔を聞けば飲みました　同
人格者も少し意氣がほしいなり　晴朗
人格を一萬圓がふつ飛ばし　大觀
(軸)吊皮へ立ち人格の端を見せ　大樓

風水害罹災者に寄す

母の名を呼ぶ子巡査の手に抱かれ　晴朗
復興へ忙しく動く足の裏　大觀
いたましい姿片割月がさし　青帆
優諚へ只泣けて來る罹災民　大樓
颱風なんぞ非常時のたん練だ　耕一路
參ります二度と歸らぬ學校道　拓水
諺の通り嵐の跡を見る　靈子
天災も神の試練と立ちあがれ　楳子雨
起き上れ力を神も貸すならん　五健
此の秋を此の冬を友思ふのみ　同

阪大川柳會九月例會（大阪）

丸島利生報

兼題　呑み過ぎ　路郎選

呑過きへ妻は子供の年に觸れ　柳秀
醉ふたのにどの内閣も氣に入らず　同
呑過きへ旦那嬉しう世話をやき　利生
捨てられたやうに呑過ぎ轉んでる　同
ぐでぐでの立小便が唄ひ出し　方正
呑過きた恰好をした席を立ち　路生
介添へがあつて呑過派手になり　芳一
新婚へすまないやうに呑んでくる　たけを
呑過ぎと云はず胃散を買ひにやり　同
小爲替に添へて呑むなと書いてあり　青一路
呑過きの朝牛のやう起される　同
呑過きてゐても要心深いこと　氷炭
二日醉懇々無日になつてゐる　楽
呑過ぎて日一ばいのことを云ひ　正甫
(人)本心に觸れ合ふ酒は度を過し　柳秀
(地)ヘラヘラの神の指圖に醉ひつぶれ　芳一
(天)二日醉ひ物に動ぜぬ姿なり　楽

兼題　老眼鏡　路郎選

珍客へ老眼鏡ははづされる　青一路
まだ貯める老眼鏡は光つてゐ　同
かけたりはづしたり老眼色氣なし　楽
柄を選る母に眼鏡が見當らず　たけを
老眼に確められる判を押し　同
新聞をつきつけて讀むアームチエヤ　あさ女
ふところの老眼鏡はさがされる　路生
もうあきまへんと眼鏡かけられる　同
若そうに見せたし眼鏡はづしとこ　方正

慈悲深い老眼鏡の御姿　氷炭
(人)君もかと眼鏡の要る笑ひ合ひ　柳秀
(地)人殺もしたとふ老眼の空ろな　方正
(天)々刊へ妾眼鏡を添へて　柳秀

雑吟

ワンピースすこしムク毛もあつても　路生
セパートをふり返つてる帝塚山　栞
新世帯三對一で持ちよつて　たけを
正直さも拔けていらい暮しる　方正
風見舞かゝわりのない女から　氷炭

阪大川柳會神無月例會（大阪）

丸島利生報

兼題　足　路　郎選

頬杖をつく足先はヤヤズに合ひ　青一路
いゝ加減足洗ひますといろはに居　同
足もとの明るいうちと切り出され　同
足は洗へず場末のバーにゐる　栞
足並が揃ふてレヴュー幕になり　栞
特選は大根足をニユツト畫き　同
横丁で逢ふてる女素足にて　同
釣革の足も舞踊の嬌態となり　同
夜汽車で足に觸つた女を想ふ　眞三
勇士又片足となり歸りたり　同
誇りを持ちつゞけて老いた馬の足　同
水虫の皮を切り切り返事する　路生
座んなはれとおちよやんの足叱る　同
サカロフの足は無氣味に生きてる　同
ストッキングぬげば女の足になり　同
おつかなさとトーダンス横を行き　同
足のリズムに獣衆引摺られ　方正

その邊で別れる足でソーダ水　氷炭
バスガールはち切れそな足を見せ　柳秀
シヤ　の後つけて足元留守となる　方正
春風を切るスカートの足の巾　柳秀
體操を隅で見てゐる松葉杖　路生
足の向きつひ替へさせる月給日　栞
(人)足音でわかりますよと迎へる　たけを
(地)シヨウウイド片足が飾られる　方正
(天)運勢を見せてる足を風が吹く　氷炭

兼題　牛　肉　路郎選

牛　肉は名のみ賄征伐し　筑川
肉鍋をつゝき乍らの師の噂　あき女
牛肉になるまで牛はたゝかれる　柳秀
牛肉なるため貨車に乘せられて　利生
五十匁の肉を鞄にしのばせて　同
ビフテキに入歯がゆるむ父にして　たけを
煮えつまる牛肉へ鼓の來る時分　氷炭
(人)コマギレのやう安つぽく扱はれ　路生
(地)戰爭のやうなすきやき子山澤　栞
(天)牛肉をすゝめる人の細いこと　眞三

雑吟

年頃へ何かと父の迂闊過ぎ　柳秀
記念寫眞やはり自分は小さいな　利生
流行妓レコードになる咽喉を持ち　同
岩田帶つゝ張りますと嬉しさう　柳秀
容られず二人今はの落葉ぶし　あさ女
(人)御破算で願ひますほどの金で　一杯
(地)靴べうは手品のやうにしまはれる　路生
(天)孝行のつもりで被せる羽根蒲團　栞

席題　嬌　態　路郎選

もう娘嬌態を作つて物か云へ　たけを
嬌態多き女となつておちぶれる　橙舎
妓けふ令嬢とふ嬌態で來る　青一路
初對面女女の座りやう　柳秀
したゝかにきこしめしてる婆の嬌態　山彦
監督は唯色つぽく嬌態をさせ　同
醒めてみれば嬌態既に夜具を蹴り　方正
その嬌態は話を逃る仕度なり　同
十八の嬌態とも見えぬ長襦袢　たけを
恥しい嬌態でソプラ唄ひ出し　同
理由のある嬌態とも知らぬ若旦那　同
嬌態もなく女椽側にふてゝゐる　路生
嬌態だけがまえであると女將云ふ　同
ツンケンと嬌態もしやくりもない女　同
のうれんをくゞるに小町嬌態がゞ　栞
段梯子女嬢しい嬌態となり　同
その嬌態を淋しう見てる實の母　同
意識せぬ嬌態で出てくる女形　同
(五)その嬌態へ名優の血が流れ　たけを
(五)人前を過ぎる女のお辭儀ぶり　柳秀
(五)天性に嬌態も加はり玉の輿　筑川
(五)嗅がれてゐても昔の嬌態でゐる　青一路
(五)長ぎせる持てば昔の嬌態となり　同
(人)嬌態つけてたゝかれる若旦那　氷炭
(地)女教員嬌態も若さもおとそ來　山彦
(天)奥樣の嬌態へ集金恐れ入り　たけを
(軸)その嬌態で莫迦にされ一人なり　路郎
(同)嬌態を博士苦々しく思ひ　同
(同)泣いてゐる女いよ〳〵色つぽく　同

柳翁、紫石、喜峰氏を偲ぶ夕（今治）

渡邊曉童報

十月十日　伊豫貯今治支店樓上

兼題　空　想　小　樓　選

空想を胸へしまへば港の灯　尼　花
鉛筆をくわえ空想してるなり　紫　陽
空想へ月が一緒についてくる　宵　明
空想のさむれば紅き茶雛頭　同
空想を一人殘して暮れる丘　尼　花
空想のうつろな笑ひとはなりぬ　心　府
目ざましに空想もろく碎だかれる　史　郎
空想のぐん〳〵のびて秋の晴れ　曉　童
（佳）空想へご飯ですよと母の聲　心　府
（同）空想の果はつめたい金のこと　曉　童
（同）空想は何時か樂しいもへ來る　小　松
（軸）眠れないまゝ空想がつゞくなり　小　樓

兼題　佛　長野史郎選

思ひ出は溜息となる佛の灯　紫　陽
魚屋へあしたをたのむ佛の日　曉　童
佛の日へ來合せた國なまり　小　樓
すえ分は佛の前を憚からず　宵　明
佛像は彼岸の色にさらされる　曉　童
命日へ佛の好きなあれやこれ　小　樓
佛像へ秋の陽ざしのとゞきかれ　宵　明
佛前に三ツになつたと言はせてみ　小　松
女らのぴんつけ匂ふ佛の間　宵　明

兼題　葉　贊我部宵明選

街路樹の葉ずれに秋を囁やかれ　心　府
落葉たく尼會の影の長々と　小　樓
芋の葉の露へ邪心は消へてゐた　心　府
秋の陽の弱く散る葉へもつれたり　紫　陽
葉の葉本に殘したまゝ嫁ぎ　史　郎
（佳）落葉とは別に鹿の子の赤い色　曉　童
（同）落葉ふむ心も秋の續づたい　一　風
（同）落ちゐ葉へ女はうしろ姿みせ　曉　童
（軸）柿の葉へ冬が迫りぬ　逼路　笠　宵　明

席題　櫛　平井小松選

船の朝女の櫛を借りてゐる　一　風
男まさり櫛おちそうに出してゐる　史　郎
うつむいた桃割の櫛みてゐたり　曉　童
櫛卷の女が見えるすだれ越し　一　風
さんせいの女房一櫛入れて立ち　故紫石
（佳）ひきつめに結つて小さい櫛一つ　心　府
（櫛）つげの櫛女に然が變つてき　曉　童
（佳）川水に櫛をしめした渡し船　一　風
（軸）お辭儀した途端に櫛がおちかゝ　小　松

席題　旅　渡邊曉童選

あきらめた戀は靜かに旅へ立ち　宵　明
輕々と嘘がつけるも旅心地　史　郎
旅をして職業柄の眼の動き　心　府
（佳）旅人のうしろ姿も秋のもの　小　松
（佳）青空へ一直線に旅のみち　小　樓
（佳）旅に出て旅の心に涙する　一　風
（軸）兒の事を思へご旅に月がすみ　曉　童

席題　銀　谷　心府選

若き日のほこりを語る銀カップ　小　樓
生活を淋しくさせる銀時計　小　松
銀ギセル過ぎた意見と知り〳〵も　曉　童
光榮に泣く母があり銀時計　故喜峰

明珠居偶會（神戸）

十月二十六日　明　珠報

知らぬ事とて一緒に笑はされ　春　秋
あんまりへおとない眼が腹を立て　同
友達にベルを押されて顔を出し　同
くさゝればならなくなつた弱りや　同
誘はれてとつとと行ける日和下駄　明　珠
女房の名の出る時がよい機嫌　同
言ふ事を言ひたい眼鏡づり上げる　同
煩惱の犬飼主を手摺らせ　な
尾行して俺も男と意識する　同
返事など書かず返事にやつて來る　華　水
サービスの一つに乳のふくらみや　同
膝枕どつちも鼻毛數へてる　同

明珠居小集（神戸）

十一月一日　明　珠報

兼題　丸　い　竹　楓選

丸々と子供裸で撮される　春　秋
丸腰になつてもやめぬ意地つぼさ　明　珠
丸火鉢笑ふてる手がすべり落ち　同
子煩惱まるい眼をしてぶたれて居　吉左右
背な丸う日なたぼつこは口が過ぎ　明　珠
（秀）仁丹が疊のへりで止つて居　華　水
（軸）なむあみだ丸き心へさす光　竹　楓
（同）まるい輪になつて夕燒小燒の子　同

席題　拳　骨　春　秋選

（秀）拳骨の下をくぐつて姉藝者　明　珠

産　湯

（軸）拳骨を開けば垢をつかんでる　春　秋

席題　人　目　華　水選

人目には旦那なんかと云はれる身　春　秋
くらがりへ來て頬張つた皮のすし　明　珠
母親と歩るき人目に氣をつかひ　吉左右
働らいて食ふのに人目はばからず　明　珠
船生帶子供もみんな裸でゐ　竹　楓
人目など知らず欠伸に節をつけ　吉左右

女中部屋誰はばからぬ座りやう　竹楓

席題　寒風　明珠選

寒風へ敎會堂の月が冴え　華水

寒風へマスクの欲しい懷手　幸捐

チヤラメラの音寒風に送られて　華水

夕刊が賣れ殘つてる寒い風　同

寒風へ出るといきなりつまづきぬ　吉左右

寒風へ研究室の燈があかい　竹楓

寒い風工場の汽笛を吹きちぎり　春秋

壺燒に伊勢の二見の寒い風　同

（軸）寒風に乞食悲しい聲になり　明珠

席題　自家用　幸捐選

追ひ越されながら自家用走つてる　華水

自家用にある日の女中一人のる　明珠

日曜の朝自家用の洗はれる　春秋

自家用へ葉卷の匂ひさせて來る　吉左右

銀行へ自家用が來る日本晴　竹楓

自家用へ歐洲航路着いてゐる　春秋

松前川柳社三回詠草

席題　追悼劍師

○

母は爐火みつめて故郷を動かず　崇木　康正選

人間を笑嘲て火山灰が降り　紀雄

平和さを踊に見せて村の秋　青柿

踊る影　見る影、月に返る影　九品子

聽水

○

人間を笑つて火山灰が降り　甲野狂水氏選

灰神樂朝日靜にのびてゐる　青柿

踊る影・見る影・月に返る影　同

聽水

（以下次號）

感冒ハ萬病ノ基豫防ニ治療ニ丸全マスクデ

實用新案登錄

最モ理想的ナ

丸全マスク

ノ出現

斷然他ノ追從ヲ許サヌ本器ノ特長

一、吸氣ニ拾五度ノ溫度ヲ增シマス
二、冬ノ乾燥セル空氣ニ濕度ヲ增シマス
三、呼吸スルニ微少ノ苦痛モ感シマセン
四、言語ニ食事ニ使用ノ儘全然差支ヘマセン
五、眼鏡使用ノ方ハ全體ニ眼鏡ガ曇リマセン
六、塵埃ヲ濾過シテ空氣ヲ清淨ニシマス
七、鼻及口ニ觸レマセンカラ氣持ノ惡イ事ワアリマセン
八、消毒清潔ガ簡單デ完全ニ出來乾燥ノ必要ナク直ニ使用出來マス
九、水溜室ガ有リマス故水摘ガ落チマセン
十、材料ガ總テ耐久性ノ品ナル故强クテ經濟的デアリマス

◎斯ノ如キ十大特長ヲ有シテ居リマス
◎是非御試用シテ見テ下サイ
◎皆樣ハ必ズヤ其ノ効果ニ驚カレマス

全マスク

大阪市大正區鶴町四丁目百七拾番地

丸全マスク本舗

文明生活ハ合理化◎マスクハ丸全マスクガ合理的

編輯の窓

▼多事なりし甲戌柳壇へ本號をラストヒットする。路郎主幹は益々健在だし社内の陣容も愈々整つたから新春特輯號より更に目覺ましい飛躍を遂げ、諸兄の御期待に副ふ覺悟である

▼南北氏の隨筆「この頃の私」からは、親しく氏に接するやうな筆觸を覺ゆる。

▼月評は中津の雨迷居を煩はした。生憎の雨降りではあつたが路郎主幹を圍んで熱心に句の打診に當つた。

▼雨迷總務は「北澤莊から」に心境を語り、抱負を述べてゐる

▼永らく愛讀を得た梅本摩山翁の「古狸窟雜筆」は本號を以て完結した。この機會に同翁並に該稿淨書の勞をとられた蛭子省二氏に感謝する。

▼好評を博してゐる「兄弟を語る」は本號で一先づ打切ることにする。兄弟が川柳作家である方々は他にもまだ〳〵活躍してゐられるが　又の機會に讓る。

▼柳壇讀報は都合で本號休載とした。

▼日本名所名物川柳は新年號から「東京の卷」を掲載することゝなつた。御期待を乞ふ。

▼十一月十一日螢ヶ池支部で川柳講演會が催され、路郎先生の「故木村晃卓氏の句について」有益、且つ興味深き講演があつた聽衆百名を超える盛會で、時折朗かな笑ひ聲も漏れてゐた。餘興として、艸樂氏と僕の謠曲、レコード演奏などあり、謡太君の奔走と史呂、與三郎兩君の援助には、涙じましいものがあつた。

▼十一月十四日大鐵局支部畔柳社大會が、大阪驛裏口向ひの鐵道倶樂部で催された。本社から路郎主幹、絲雨、汀柳、艸樂、亂耽、與三郎、史呂、禿山、龍三等及僕が出席、席上路郎先生は「川柳家の眼、子供の話」について講演された。出席者約四十名、なごやかな句會であつた

前號正誤

四一頁、難産へ柱時計はゆるう打ち、以下三句は、西いわを君の句

川柳雜誌社聯合
京阪神各支部
川柳忘年大會

あはたゞしい師走がいよ〳〵迫つて來ました。年末は多忙のため恒例により本社十二月例會を廢し支部聯合主催の第八回忘年川柳大會を開催いたします。御承知の通り當日は桁を外づした賑やかな句會で本年は更に素晴らしい興趣もある句會にしたいと幹事一同は力んでゐます、貴下は勿論のこと一度も句會に出席されぬ方々もお誘ひ合せの上御來場を願ひます。

日時　十二月六日(木)午後六時三十分

會場　道頓堀倶樂部（電話南二七四八番）（大阪市南區日本橋南詰東入）

司會者　日野萬華　庄よし

開會之辭　徹夜三句　麻生路郎選

兼題　銀貨三句　山本雨迷選

同　芝居の裏　食滿南北

講演　川柳家は第三者　麻生路郎

同　朝田新水

閉會之辭　三十錢（鉛筆御持參）

會費　天、地、人、五客、十秀へ呈賞

賞品　兼題、席題ヲ通ジテノ最高點者へ優勝銀盃ヲ呈ス

優勝盃　出席者全部へ粗品呈上、記念寫眞撮影

一主催

道頓堀支部　幹事　庄萬よし
九三會支部　同　北山蕉竹
梅田支部　同　首藤風郎
神戸支部　同　光陽合奥野禿山
螢ヶ池支部　同　竹内板見女
京都支部　同　御影旅人
鶴町支部　同　妹尾翠人

一後援

御池支部　幹事　植山いわを
大鐵局支部　同　四陽九天
螢ヶ池支部　同　今里支部　同　住吉支部　同　竹内板見女
玉造支部　同　奥野禿山
光明支部　同　須崎豆秋
天王寺支部　同　永田里十九
清水支部　同　友朝子
塩浜支部　同　貧子

川柳雜誌社

大阪市南區疊屋町六番地（永田里十九方）

京阪神支部聯合句會事務所

投稿規定

▼投句は總て葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。

▼「近作柳樽」は全作家の雜吟を募る

▼「川柳塔」への投句は同人に限る。

▼各地會報は半紙判原稿紙に清記の事

▼文章は二十字詰原稿紙使用の事。

▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記の事

▼締切は嚴守されたし。

▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入の事。

募集

第十二卷第二號課題

十二月五日締切

（各題十句以内）

▼自慢　長崎柳秀選

▼面會　姫田夕鐘　市塲沒食子共選

第十二卷第三號課題

一月五日締切

（各題十句以内）

▼商人　朝田新水選

▼工塲　山本雨迷選

毎號募集

▼近作柳樽（雜吟十句）　麻生路郎選

▼各地柳壇（會報）

▼文章（評論研究感想吟行漫文）

社告

事務所が移轉いたしました＝社務一切は事務所宛＝

定價

一部　金參拾錢

半箇年前金（特輯號共）壹圓八拾錢

壹箇年前金（特輯號共）參圓六拾錢

廣告料

本誌への廣告に就いては事務所へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます。

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中にでも頂ける樣に願ひます、但集金郵便（一年分）には定價の外に手數料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は書新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和九年十一月廿五日印刷

昭和九年十二月一日發行

第十一卷　第十二號

（毎月一回一日發行）

編輯兼發行印刷人　麻生幸一郎　大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地

發行所　川柳雜誌社　大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地　電話天下茶屋二五七九番

事務所　川柳雜誌社　大阪市天王寺區上汐町一丁目五一番地　電話南六四四番　振替大阪七五〇五〇番

禁無斷轉載

賣捌書店

（大阪）大賣捌　二盛社書店—明文堂　其他　市内　各書店—

（東京）東京堂　巖松堂　吉岡書店　玉森堂　紀伊國屋（神戸）米田、寶文館（廣島）石塚（京都）三宅（名古屋）靜觀堂

川柳雜誌社關係の人々

（順はろい）

贊助員

池澤樂居　長谷川一徹　伊藤彦造　大道弘雄　鳥山一歩　岡本一平　大島清明　片岡直方　大谷五花村　笠原路生　大西長三郎　嘉納純　岡田三面子　田中辰二　亀井晟修　長崎柳秀　川上三太郎　長岡半太郎　長野晴濱　米村あん馬　國枝史郎　田村孝之介　藤村作　谷脇素文　藤本卯之助　篠田銀波楼　穎原退藏　安川久流美　赤井清司　前田雀郎　淺田一　前田五健

同人

末弘嚴太郎　食滿南北　柴谷宰二郎　篠原春雨　蛭子省二　藤里好古　小林不涙人　森東魚　吉川啞人　谷村稔　立井登美坊　中澤濁水　西おさむ　村松夢　熊谷紅　岩崎柳路　石曾根民郎　市塲沒食子　長谷川三汀　朝田鶴　近藤勇　松下小柳子　福田峰　西村明珠　西いわを　大喜由　大西八歩　鶴町青　明木史　阿形一次　江戸杉　後藤青　見呂　田幸捐　笹田角丸　北山悟郎　岡丘奥野秀　遊舟白　龍三

編輯局（同人）

喜多春秋　春元紀太　三宮白峰　輪夏曉　谷鮎葉　水芝四　清水友帆　平井蒼太　平井春光　日野華水　東谷聞路　廣田六浦　姫田夕鐘　妹尾變人　毛利九波　須崎豆秋　首藤竹楓　高橋かほる　永田里十九　山本丹路　阿部閑生　關本雅幽　萬よし

主幹

橋本絲雨　西田艸樂　山本雨迷　増位汀柳　福田山雨樓　麻生葭乃　住田亂耿　麻生路郎

道頓堀支部（大阪市）幹事庄　万よし　松山支部（松山市）幹事石丸晴朗　九三會支部（大阪市）幹事北山悟郎　御旅支部（大阪市）幹事生田翠夢　神戸支部（神戸市）幹事首藤竹楓　天王寺支部（大阪市）幹事須崎豆秋　岡館支部（岡館市）幹事亀井晟修　鶴町支部（大阪市）幹事妹尾變人　高知支部（高知市）幹事國澤春水　梅田支部（大阪市）幹事水谷鮎美　御池橋支部（大阪市）幹事西いわを　松江支部（松江市）幹事梶谷巷二　釜青支部（大阪市）幹事熊谷紅　大鐵局支部（大阪市）幹事植山九天　西條支部（愛媛縣）幹事荒井英賀夫　光櫂會（大阪市）幹事竹内機見女　住吉支部（大阪市）幹事奥野秀山　北濱支部（大阪市）幹事谷村稔　今里支部（大阪市）幹事市塲沒食子　奉天支部（奉天）幹事江戸みつる　八東支部（島根）幹事平塚亂笑　玉造支部（大阪市）幹事清水友帆　今治支部（今治）幹事渡邊曉童　光笑會（大阪市）幹事永田里十九　新居濱支部（愛媛）幹事越智虹子　伯耆支部（鳥取）幹事三鴨美笑　竹原支部（廣島）幹事町田承春　鯱川第二支部（島根縣）幹事尾添好郎　行人會（大阪市）幹事平井春光

鯱川支部（島根縣）幹事尼絲之助　京都支部（京都市）幹事平岩司郎　鳥取支部（鳥取市）幹事中島鐵州　堺支部（堺市）幹事八木美夜路　田邊支部（和歌山）幹事辻左馬太　螢ヶ池支部（大阪府）幹事石森靜太

川柳雜誌案內

六雜語字十四字臨三行金五十錢、一行增すごとに金十錢（但し節金十切手代用可）、號號、移轉、句會案內、柳界廣告、その他

並製 合本特賣

「川柳雜誌」の合本第二卷より十卷まで

各壹卷 金壹圓五十錢

大阪 市內送料壹册六錢
市外送料壹册廿四錢

大阪市住吉區平野西之町八三
川柳雜誌社

懸賞川柳募集

題「新妻」 路郎選
十二月十日締切

その他雜吟を募る

▼用紙 官製ハガキ（化粧柳壇と明記の事）

▼賞品 秀逸數句溥謝を呈す

▼投吟所 大阪市玉出本通三の三六 麻生路郎氏宛
化粧新聞社

川柳きやり

菊判每號七十數頁

每月一日發行一部廿五錢

東京豐島區高田本町二の一四六八 川柳きやり吟社
（取次所）川柳雜誌社事務所

蒐集

▼新聞、雜誌（川柳の雜誌以外）に掲載ある川柳に關する記事の「切抜」

▼川柳家の集合寫眞、個人寫眞

▼川柳の短册、色紙

右の品雜誌の編輯上必要に付御贈與下さい。

大阪市住吉區平野西之町八三
橋本綠雨

路郎先生筆春掛用

掛軸・橫額・小物・短册

軸 圓入 貳拾圓
小物 五圓 短册 額拾圓參 （前金）

中込締切十二月十五日

川柳雜誌社代理部

柳壇近況

一、川柳家の消息
一、柳界ニュース
一、柳誌の創刊、廢刊
一、柳書の刊行

▼その他の主なる諸事項を本誌にて紹介を致しますから皆樣から御投稿を願ひます。

▼採否は編輯局一任のこと。

大阪市天王寺區上汐町二ノ五一
川柳雜誌社編輯局

朝報柳壇

雜詠募集 汀柳選

用紙 ハガキ、句數無制限

大阪市西區四ッ橋南
大阪朝報社
增位汀柳宛

每日川柳の事を揭せてゐる大阪朝報をお讀み下さい。

道ブラから天牛へ

書籍賣買 **天牛本店**

大阪市南區日本橋南詰東入南側
電話南二七四九番

川柳手拭

路郎主幹の染筆

金二拾錢（送料共）

社告

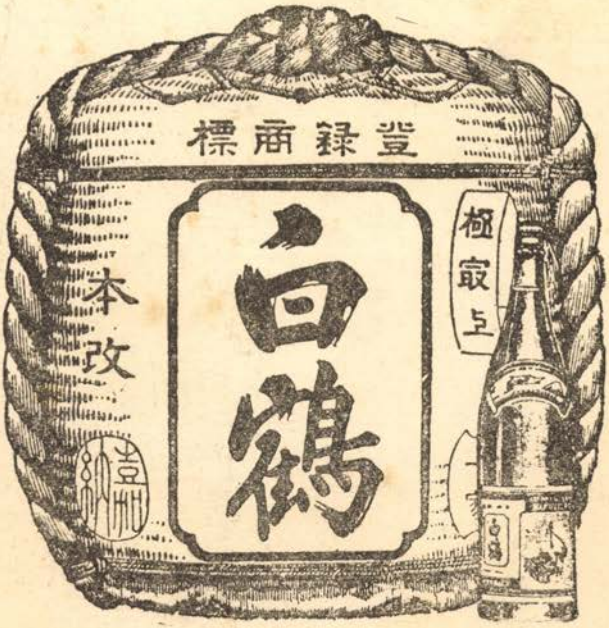
本社の例會案內希望の方は左記へお知らせをお願ひします

東區道修町五ノ三四
會報係 毛利 九波
電話本局一五六四番

清酒

白鶴禮讃

白鶴の瓶たまることたまること
白鶴へみんな揃ふたいゝ話
いゝ酒と言へば白鶴持つてくる
白鶴を一本つけてからの事
百事意の如く白鶴呑んでゐる
當選に白鶴樽のままで來る
貧乏の中に白鶴だけの味



攝津灘 嘉納合名會社釀

この會社
この保險

一番大きな會社であること。一番すぐれた内容を持ち一番信頼出來る會社であること。保險料は安く而も多額の配當を行ひ、又優秀寛大な保險約款に依り親切な取扱をする會社。つまり會社もその提供する保險も理想的な會社。これが日本生命である。

日本生命

大阪東區今橋四丁目